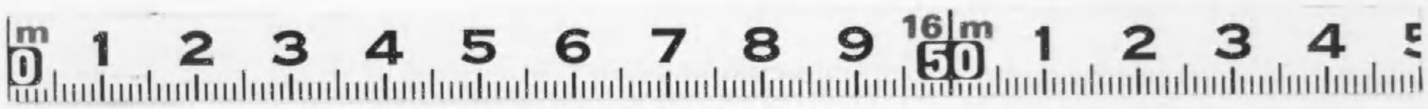
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 16 50 1 2 3 4

特116
649

著原トンキデェウ

曲戯の萌え出で

譯一茂山青

大正
13.10.2
内交

解　題

本書は獨逸文豪フランク・ウエドキンドの有名なる傑作『ブリユーリングス・エルワツヘン』を譯したものである。此戯曲は頗る有名なるもので、少年子女に對する性教育の痛切を說き、當時の社會に大波瀾を起したものである。

假面をつけた人へ

此の譯書を今は亡き
兄 大槻隆一の靈にさゝぐ

第壹幕

第一場　居間

ヴェンドラ　お母さん。何故、そんなに長く着物をこしらへて下すつたの。

ベルグマン夫人　だつてお前、今日で最早十四に成つたのですもの。

ヴェンドラ　そんなに、着物を長くこしらへて下さることが解つてゐたら、十四になんか成らない方がましだつたわ。

ベルグマン夫人　ヴェンドラ。此の着物は少しも長過ぎやあしませんよ、お前は一體どうしようと云ふ氣なの。お前がひと春毎に二吋位づゝ丈が延びて行くのを、お母さんはどうしようもないじやあないか。お前の樣な年柄の娘が、短い着物を着て、歩いてはゐられませんよ。

ヴェンドラ　だつて、此の長い夜着見たいなものより、短い方がよつぽどよく私に似合つてよ。——もう一度着せて頂戴ね、お母さん。此の夏の間だけでもいゝか

ら。こんな懺悔服なんか、十四だつて十五だつて、いつだつて着られるわ。——ねえ、次の御誕生日迄とつときませうよ。今だと裾飾りを破くばかりだわ。

ベルグマン夫人　さあ、どう云つたらいゝだらうね。お母さんだつて、お前を今の儘の様にして置きたいのだが。ね。お前位の時の他所のお娘さん達は、何んとも云やしませんよ。お前はまるで反對だね。——他所のお子さん達が大きく成つて行くのに、お前計りは、いつもそれぢやあどうなるんでせう。

ヴェンドラ　どうなるか分るもんですか。——それとも、死んぢやつて了ふかも知れないわ。

ベルグマン夫人　まあ、どうしてお前は、そんな考へを！

ヴェンドラ　いやだお母さん、そんなに本氣になつて。

ベルグマン夫人　（娘に接吻しながら）　たつた一人の可愛いゝ子！

ヴェンドラ　私、夜寢られない時にそんな考へが浮ぶのよ。そんな事位で悲しくは

なりませんわ。そんな時の方が却つてよく眠れるのが分つてゐるのですもの。いけなくつて、お母さん。そんな事を考へるのは。

ベルグマン夫人　では、長い着物を戸棚に藏つてお置きなさい。仕様がないから、短いのをお着なさい。——それに變つた裾飾りでも付けて上げませう。

ヴェンドラ　（戸棚の中に着物を掛けながら）　いつその事直ぐにも二十歳になりたいわ。

ベルグマン夫人　なあにね、お前さへ寒くなければいゝのですよ。その着物もこしらへた時には、たけもゆつくりあつたんだがねえ——

ヴェンドラ　だつて夏じやありませんか——お母さん。子供だつて、足から風邪なんか引かないわ。誰れがそんなにびく〳〵してゐるものですか。こんな歳で風邪引くだなんて——まして足からなんて。でも、暑過ぎた方が私にはいゝの？　お母さん。若しか私が、袖を引きちぎつて、靴も靴下もはかないで、日の暮れに、

お母さんの所へ往つたとしたら、まあどう？――若し長い着物を着るんだつたらお伽噺の女王の様な風采をするわ。――どう、お母さん。誰れも、必つと振向もしませんよ。

第二場　日曜日の暮方

メルヒオール　僕はもう、すつかり倦きちやつた。何んにもするのが、いやになつちやつた。

オットー　なら、僕等も止めていゝんだ。――君は勉強するかい。メルヒオール。

メルヒオール　いゝから遊んでおいでよ。

モーリッツ　君は何處へ行くの？

メルヒオール　散歩にさ。

ゲオルグ　だけど暗く成つて來たぜ。

ローベルト　君は最早、勉強をすましたの？

メルヒオール　暗く成つてから、散歩しちあいけないかい？

エレンスト　中央アメリカ！――ルイ十五世！――ホーマーの六十詩句！――方程式七世か！

メルヒオール　いやな仕事だなあ！

ゲオルグ　ラテンの作文だけでも、明日でないといゝがなあ。

モーリッツ　考へ事をしやうとすりや課題が邪魔になつてね、考へごとなんか出來ない。

オットー　僕は、家へ歸る。

ゲオルグ　僕も、勉強しに。

エレンスト　僕も、僕も。

ローベルト　さよなら、メルヒオール。

メルヒオール　おやすみ。（モーリッーとメルヒオールを殘して皆々行つてしまふ）

僕は、一體何んの爲めに世の中に居るのか、知りたくて仕樣がない。

モーリッツ　僕は、學校なんかに行くより、一層馬車馬にでも成つた方がましな位だ。――どうして學校へ行くのかなあ？――つまり試驗をさせられる爲めだ。そして、何故僕等は試驗をさせられるのだ？――落第させられる爲めだ。七人は間違ひなしに、落第するんだぜ、何故つて、上の級には六十人切りしか取らないんだから。――僕はクリスマス以來、變な氣持なんだ。――チェッくそ、親爺さへ居なけりや、今日でも荷物を引つからげて、アルーナに行くんだがなあ。

メルヒオール　何んか外の事を話さうぢやないか。――（二人共散歩に行く）

モーリッツ　あそこに、尻尾をおつたてゝゐる黑猫が見えるだらう。

メルヒオール　君は、前兆を信じるのかい？

モーリッツ　よくは分らないがあいつは向ふから來たんだ。大した事ぢやあないよ。

メルヒオール　僕は、それは渦卷の樣なものだと思つてゐる。迷信のシルラ（カリプディス）

（シルラの説明――伊太利メッシナ海峽の彼岸にあつて此の間を通過する者必ず一者の一に捕はると云ひ傳ふ――譯者註）

から逃れたと思ふと、又引きづり込まれて仕舞ふんだ。――此の柑の木の下に腰かけやうじやないか。涼しい風が山の向ふから吹いて來る。僕は、あの森の中の、一番高い枝を搖籃にして、夜は何時でも搖られてゐる森の女神の樣になりたいよ。

モーリッツ　君、チョッキの釦を外せよ。

メルヒオール　あゝ！　上着がふくらんで居らあ。

モーリッツ　これはこれは、馬鹿に暗く成つて來たね。一寸先も見えやあしない。君の居るのは何處だ？　君はこう思はないか。人が恥かしい思ひをするのは、敎育を受けた爲めだと云ふことを？

メルヒオール　つい一昨日も其の事を、考へたよ。僕の考へだと、其りやあ、人間の性質に深く根ざして居るんだと思ふんだ。君が仲のいゝ友達の前で、素裸に成

らなければならないと思つて見給へ。その友達も素裸にならないなら、君だつてそんな事をしたくはなからう。——だから、そりやあ流行と同じ様なもんだと思ふんだ。

モーリッツ　僕はね、時々こんな事を考へるんだよ。若し僕にね、男の子と女の子供があつたら、そいつらを同じ一つの室に入れといてやるね。それから、出來る事なら、一つ寢床に一處に寢かすし、朝晩着物を着たり脱いだりするのは、お互ひにやらせるんだ。暑い陽氣の時分なら、女の子と同じ様に、男の子にだつて、一日中、白い毛織の肌着に、帶だけにして置くんだ。——若しそんな風にして大きくなつたら、いま、僕等がこうやつてゐるよりか、もつと平氣で居られるだらうと思ふんだ。

メルヒネール　僕もきつと、そうだらうと思ふ。君。——唯問題なのはね、女の子に子供が出來たら、其の時は？

モーリッツ　どうして女の子にや、子供が出來るんだらうね。

メルヒオール　そりやあ僕は、本能だと思ふんだ、例へばね、雄猫と雌猫とを一處に育てゝ、二匹共、外部から關係させないで放して置くのさ。つまり、全くそいつ等の意志に任かして置くのだ、そうすれや雄猫にだつて雌猫にだつて、別に誰れも教へてやらなくつても、遲かれ早かれ、雌猫は姙娠して來ると思ふね。

モーリッツ　畜生にはそんな事もあらふよ——

メルヒオール　人間だつて同じ事だと思ふ。ねえ君。其の君の男の子と、女の子とやらを、若し一つ寢床に寢かして置いて見給へ。たしかに、男の子の感情は、いつの間にか知らず知らず起きて來るよ。——僕は、誰れとでも賭をしてもいゝ。

モーリッツ　そりやあ、ほんとうかも知れないよ。——それだけども——

メルヒオール　君の女の子の方だつても、それと同じ歳に成れば、男の子と變りはないさ。どの娘もどの娘もつて云ふんじやあないが——たしかに同じ様だと、斷

定は出來ないけれど――兎に角、假りにでも、推測されるよ。――そうしたら、女の子の好奇心だつて、平氣じやあ居まい。

モーリッツ　ついでに、もう一つ聞きたいんだがね――

メルヒオール　何んだ？

モーリッツ　返事して呉れるかい？

メルヒオール　無論さ。

モーリッツ　ほんとうか？

メルヒオール　僕の此の手で誓ふよ。――さあ、モーリッツ。

モーリッツ　君はもう、作文を書いちやつたのかい？

メルヒオール　打ち開けて、ほんとの事を云ひ給へ！――ここにや誰れも、見てゐる人も聞いて居る人も、居ないじやあないか。

モーリッツ　勿論、僕の子供等は、一日中庭で働くか、身體が丈夫になる遊戯で面

白がつてゐるさ。馬に乘つたり、體操をやつたり、木登りしたり、しなけりやならないよ。そして、、、とかく僕の樣に寢付かれなくはないさ。僕等は、おそろしく弱くなつてゐる。――よく寢られさへすれば、夢なんか見ないと思ふけど。

メルヒオール　僕はこれから、葉の落ちる頃迄、ハンモックばかりで寢る事にしよう。僕の寢床はストーブの後に押つ付けてあるんだ。それは疊む奴さ。――去年の冬、僕は家のロロを、手足の動かなくなる程、毆つてやつた夢を見たよ。そいつが、今迄見た夢のうちで、一番怖ろしい奴だつたね。――どうしてそんなに、不思議さうに、僕を見てゐるんだい？

モーリッツ　君はもう、經驗したのかい？

メルヒオール　何あに？

モーリッツ　當てゝ見給へ。

メルヒオール　男の感情か？

モーリッツ　む――む。

メルヒオール　無論だよ！

モーリッツ　僕だつて……。

メルヒオール　あれなら、ずつと前から知つてゐるんだ。――ほとんど一年位前だ。

モーリッツ　僕は、電氣にうたれた樣に、驚いたね。

メルヒオール　君は夢を見たね？

モーリッツ　ほんの短いのをさ。――薄青い衣服で包まれた足が、先生の机の上に登つたんだ。――正しく云へば、机の上を飛び越さうとしていた樣に思つた。それを、ほんの一寸の間見た丈さ。

メルヒオール　ケオルグ、ツィルシュニッツは、お母さんの夢を見たとさ。

モーリッツ　それを君に話したのかい？

メルヒオール　あそこの絞首臺の道でさ。

モーリッツ　僕があの晩から、どんなに苦しいのを我慢してゐたか、君が解つて呉れたらなア。

メルヒオール　良心の煩悶だらう？

モーリッツ　良心の煩悶？――死の苦しみさ。

メルヒオール　えらいなあ。

モーリッツ　僕は、自分でどうにも仕樣のない男だと思つたね。內心の惡事で苦しんでゐるんだと思つたんだ。――とうとう、僕は、僕の人生の追憶を書き記して置かうとしはじめてから、やうやく平靜になつたんだ。そうだ。そうだ。メルヒオール君。此の三週間ばかりは、僕にやゲーセマネだつたね。

メルヒオール　そうなる前に、僕は多少用意はしてゐたね。僕は少し氣まりが惡るかつたよ。――だけど、それつきりさ。

モーリッツ　だけれど、君の方が僕より、丸一年若いもの。

メルヒオール　年齢なんか、幾つだつてもいゝさ。君。僕がいろ〳〵経験して見ると、此の幻影が出て來るのは、別に年齢なんかによらないな。君は麥わらのやうな頭髪をした鷲鼻の大きなレエムメルマイエルを知つて居るだらう。あいつは、僕より三ツも年上だよ。あいつ今でも、お菓子や砂糖漬の杏の夢ばかりしか見ないんだつて、ヘンス、リローが云つてゐたよ。

モーリッツ　だけど、どうしてヘンス、リローは、それを知つたんだらうね？

メルヒオール　聞いたんだよ。

モーリッツ　聞いたんだつて？——僕は誰れにも聞いては見なかつた。

メルヒオール　だけど、僕に聞いてゐるじやあないか。

モーリッツ　あゝそうだ。——ヘンスも、必つと遺書を書いたらう。——ほんとに世の中つて僕等を、馬鹿にしてゐるんだな。それだのに、そいつを有り難がるなんて、思ひもよらなかつた。こんな興奮に、あこがれて居たなんて、思ひ出しても見なかつた。何にもかも、又前の様に靜まるまで、何うして寢られないのかなあ。僕の親達だつて二百層倍もいゝ子が持てたのに。僕も生れては來たものゝ、どうして生れたか知らないし、それでゐて、世の中を捨てちやあいけないと云ふ責任は持たされるし——どんなふうにして、此の渦卷の中に引つぱり出されたか時々考へて見た事がなかつたかい？　君。

メルヒオール　それじや君はまだ、それを知らないのか？　君。

モーリッツ　どうして僕が知るもんか。僕は牝鷄が卵を生むのも見たし、お母さんが僕を懷の中に入れてゐたつていふ事も聞いたけど、それだけでは何んにもならない。それから又、僕が五ツの時だつたと思ふが、誰れだか、屑も露はなハートのクィーンをめくると、變な氣がした事があつた。其の時の感情は消えて失つたが、其れと同時に、今でも女の子と話しをしてゐると、殆んど變な事を考へなしじや、いられないんだ。それで——君には誓ふが——何んにも知らないのさ。

メルヒオール　じや僕はすつかり君に話してやらう。僕は、本でも讀んだし、繪でも見たし、自然を觀察したりしても、知つてゐるよ。驚いたどらう。それで僕は無神論者になつたんだ。ゲオルグ、ツィルシュニッウは、ヘンス、リローに其れを話したかつたが、ヘンス、リローは子供の時に、女の家庭教師から、すつかり教はつてゐたんだよ。

モーリッは　僕はマイエルの小字典を、AからZまで皆んな見たんだ。一連の字さ——字や言葉だけさ。はつきりした說明なんか、少しもないのさ。あゝ、氣まりが惡いな。——人生の重大問題を說明して呉れない樣な字典なんか、何んにもなりやしないや。

メルヒオール　いつか君は、町で二匹の犬が驅けて行くのを見た事があるかい。

モーリッツ　イヤ！——今日は何んにも話さないで呉れよ。メルヒオール君。僕は中央アメリカとルイ十六世の事があるし、それから、ホーマーの六十詩、方程

式が七題にラテン作文。——明日も亦、どいつもこいつも間違へるかも知れないせ。うまくやらうと、あくせくやれば、牝牛の樣に間拔に成らなきやあ成らないし。

メルヒオール　僕の室へ一處に來ないか。四十五分もかゝれば、ホーマーも方程式も散文の二つも出來るよ。君のやつた奴の間違ひを、一ッ二ッ直してやらう。お母さんが又、僕等にレモナードを造らへて呉れるぜ。そして繁殖論を面白く話さうじやないか。

モーリッツ　僕にや出來ない。——愉快に繁殖論なんか話せないよ。君に好意があるなら、云はうと思つてゐる事を、書いて呉れないか。知つてゐる丈の事を書いて呉れよ。出來る丈、簡單明瞭に書いて、明日休みの時間に、僕の本の間へ入れて置いて呉れないか。僕は、それが入つてゐることを知らずに、家へ持つて歸るだらう。そして思ひがけずに發見すれば、目が疲れてゐても、其れを見ないじや

あ居られなくなるよ。——説明するのに難かしい様な場合には、略圖でも何でもかひてくれ給へ。

メルヒオール　女の子のやうだなあ。まあ、いゝやいゝや、君の云ふ通りにしよう。僕にや、非常に面白い仕事だから——一寸聞きたい事があるがね。君。

モーリッツ　ふむ？

メルヒオール　君は女の子を見た事があるかい？

モーリッツ　あゝ。

メルヒオール　すつかりだよ？

モーリッツ　うむ。すつかり。

メルヒオール　僕もさ。——それじやあ、圖は要らないな。

モーリッツ　謝肉祭の時、ライリッヒ解剖學博物館で見たよ。若し見つかつたら、學校を追ひ出されたらうよ。晝の光の様に綺麗で、それに——まるでほんものの様だつた。

メルヒオール　僕は去年の夏お母さんと一處にフランクフルトに行つたんだ。——もう行くのか？　君。

モーリッツ　勉強しなけりやならないんだもの。——さよなら。

メルヒオール　ぢやあ又會はう。

第三場

テア、ヴェンドラ、マルタの三人の女の子が腕を組んで通りを歩いて來る。

マルタ　まア靴の中に水が泌み込んで來る。

ヴェンドラ　頬べたに風が吹きつけること。

テア　胸がどきんどきんするわ。

ヴェンドラ　あの橋を渡りませうよ。イルゼさんが謂つてよ、河の中にはいろんな

木片が流れてゐるつてよ。男の子なんか筏を造らへるんですつて、メルヒ、ガボールは、昨日もう少しで溺れてしまう所だつたつて。

テア　でもあの人は泳げてよ。

マルタ。えゝそうよ。

ヴェンドラ　あの人、泳げなかつたら必っと溺死してるわ。

テア　頭髪が下がつて來てよ。マルタさん。髪が下つて來たわよ。

マルタ　いゝわ。落ちて來ても。何時でもこわれて來るのよ。あなたの様に短い髪にする事は出來ないし、ヴェンドラさんの様におさげにも出來ないし。前髪を切る事も出來ないで、平常でも家で髪を自分で結はなけりやならないのよ。それも、これも、叔母さんが、やかましいからよ。

ヴェンドラ　明日お祈りの時に、私、鋏を持つて行くわ。「迷はぬ者ば幸福なり」つてあなたが云つてゐる間に私が剪つて上げるわ。

マルタ　後生だから、ヴェンドラさん。よして頂戴。それこそお父さんにひどくぶたれるし。お母さんには三晩も炭小屋に押し込められちまうわ。

ヴェンドラ　マルタさん。お父さんは何うしてぶつの。

マルタ　内のお父さんやお母さんは私の様ないたづらつ子がゐないと、張り合ひがいのじやないかと思ふわれるのよ。いつもそんな氣がするの。

テア　まア。

マルタ　あなた。襦袢の先に青いリボンをつけてもいゝつてお許しを得たの。

テア　赤いリボンよ。お母さんてば赤いリボンは私の様な大きな黒眼には似合ふと思つてゐるの。

マルタ　私には青が似合ふの。——だけどお母さんに寢床から頭の髪をつかんで引ずり出されたわ。床の上に手をついて倒れたわ。——それでもお母さんは毎晩私等とお祈りはするわ。

ヴェンドラ　私が、そんな事をされゝばとつくのむかし家を飛び出してゐるわ。

マルタ　お母さんには、私が、これから先どうなるか、解るんですつて。――本當に見え透いてゐるつて。――でもお母さんがどうにかして見て上げるつて。――お母さんは少しも惡氣のない人ですものね……

テア　ふ　む、ふ　む。

マルタ　テアさん。あなたのお母さんはどう考へてゐるのかあなたに解つて。

テア　解らないわ。――あなたは、ヴェンドラさん。

ヴェンドラ　私はあなたのお母さんに聞いて見たいわ。

マルタ　私地べたに寢そべつて、大きな聲で泣いたのよ。そしたらお父さんが入つて來て、私の襦袢をビリ〳〵と破ぶいちやつたの。わかつたでせう。私戸口から出て終つたの、私通りへ飛び下りようかとさへ思つたわ。

ヴェンドラ　だけど、まさかそんな事。マルタさん。

マルタ　私寒くつて凍えちやつたわ。で、戸を開けて入つたの。そして一晩中袋の中で寢たのよ。

テア　私まあ袋の中なんかに、どんな事したつても寢られやあしないわ。

ヴェンドラ　あなたの代りに私、一度袋の中で寢て見たいわ。

マルタ。たゞ打たれさへしなきあね。

テア　だけど、そんな中で窒息するでせう。

マルタ　首だけは外に出して置いて、頤の下の所で、いわいておくのよ。

テア　そして、それで打たれたの。

マルタ　いゝえ、それは特別の時だけの事よ。

ヴェンドラ　マルタさん。何んでもつてぶたれるの。

マルタ　そりや。手當り次第のもの　だわ。――あなたのお母さんもお床の中などで、物を食べちやあいけないつて云つて。

ヴェンドラ　いゝえ。そんな事。

マルタ　私、お母さん等だつて、それが樂しみなんだと思つてゐるわ。——そりやお母さん等はそんな事を云はないけどね。——私が子供を持つ樣になりや、家の花園の雜草の樣に育てゝやるわ。誰もかまつてやらなくたつて、どん〳〵大きくなつて行くわ。——それだのに、花床の薔薇は一夏毎にだん〳〵貧相になつて來るわ。

テア　私しが子供を持てば、みんなすつかりばら色の着物を着せてやるわ。帽子も赤なら着物も赤だし、靴も赤。靴下だけは——靴下だけはね、夜の樣に黑くするの。散歩の時は、私の前に皆んなを歩かすわ。——あなたわ。ヴェンドラさん。

ヴェンドラ　だつて貴方は子供が出來るかどうか、どうしてわかる。

テア　なぜ私等は子供を持つちやいけないの。

マルタ　ほんとに、オウフミエヤおばさんには一人も小供がないのよ。

テア　お馬鹿さんだわね。そりやあ、お嫁に行かないんですもの。

ヴェンドヲ　バウエルおばさんは、三度もお嫁に行つたけれど、一人も子供がないわ。

マルタ　ヴェンドラさん、あなたが子供を持つとしたら男の子の方がいゝか女の子の方がいゝかどつちがよくつて。

ヴェンドラ　男の子だわ。男の子の方だわ。

テア　あたしもやつぱり男の子の方よ。

マルタ　あたしもそうよ。三人女の子が出來るより二十人男の子が出來た方がいゝわ。

テア　女の子は、倦ちやうわ。

マルタ　私、女の子に生れなかつたらきつと男の子になつてゐたと思ふわ。

ヴェンドラ　マルタさん。それは趣味の問題ですわ。私は毎日、女の子に生れた事

を喜んでゐますもの。ほんとうよ。私、王子とだつて代るのはいやですわ。——
それだから男の子が欲しいといふのよ。
テア　それは、考へ違ひよ。ヴェンドラさん。ほんとに考へ違ひだわ。
ヴェンドラ　だけど、私、女の子に可愛がられるよりか男の人に可愛がられる方が
どのくらひ、ましだか知れないんですもの。
テア　だけど、そうも云へないわ。學士のブフェルレさんは、メリッタさんが愛して
居るほど愛してやしないことよ。
ヴェンドラ　それはそうだわ。テアさん。ブフェルレさんは、いばつてゐてよ。あの
人は林學士だつて云ふので、いばつてゐる人だわ。——だつてあの人何んにも持
つてゐないんですもの。——メリッタさんは幸福だわ。だつてあの方は自分より
千倍もえらい人を手に入れたんですものね。
マルタ　あなたたつて、御自分の事を自慢なさるんじゃないの。ヴェンドラさん。

ヴェンドラ　私何んでもないわ。
マルタ　私が、あなただつたら容貌を自慢してやるのに。
テア　一寸あの歩き方を御覺なさいよ。あの見つめた眼——　あの樣子。マルタさん
あれでいばつていないんでせうか。
ヴェンドヲ　まあどうしたと謂ふの。私、女の子に生れたので幸福だわ。女の子で
なかつたなら此の次には自殺してしまふわ。
（メルヒオール通りすぎてあいさつして行く）
テア　あの人はとても頭がいゝんですつて。
マルタ　私、アリストートルへ學校通ひをした若いアレキサンダーを思ひ出すわ。
テア　まあギリシヤ史を！——私、アレキサンダーが驢馬の影を賣りつけた時、ソク
ラテスが、桶の中に寢てゐた位の事しかおぼえてなゐいのよ。
ヴェンドラ　あの人、クラスで三番よ。

テア　クノッエンブルヒ先生があの方はならうと思へば一番にでもなれるんだつておつしやつたわ。

マルタ　あの人は奇麗な額をしてゐるわね、でも、あの人のお友達は、利巧相な顔つきをしてゐるわ。

テア　モーリッツ、シュティフェルさん？——あの人は朝寝坊さんよ。

マルタ　私、いつもよく、あの人とお話ししてよ。

テア　あの人は誰れでも會ふ人を馬鹿にするわ。リローさんの家で會があつた時、私にボン〳〵を下すつたわ。一寸考へて御覽なさいよ。ヴェンドラさん。其れはね柔らかくつて暖かだつたわ。そうじやなかつて。——ずぼんのかくしにあんまり入れて置いたもんだからつておつしやつたわ。

ヴェンドラ　その時、メルヒ、ガボールさんてば、あの人は何んにも信じない人だつておつしやつたわ。——神様も、天國も、——此の世の中の事何んにも信じないんだつて。

第四場

學校の前の遊歩場、メルヒオール。オットー。ゲオルグ。ローベルト。ハンス、リロー。レムメルマイヤー。等。

メルヒオール　誰れか、モーリッ●シュティーフェルは何處にかくれてゐるか知らないかい。

ゲオルグ　あいつ、ひどい目にあつてゐるかも知れないよ。——ひどい目にあつてゐるかも知れないや。

オットー　あいつ、無鐵砲な事をしたんだからなあ。

レムメルマイヤー　あきれたね。僕は今だつて、あいつの眞似ならいやだ。

ローベルト　生意氣だなア——傲慢な奴だ。

メルヒオール　ど――ど――どうしたんだつて？
ゲオルグ　どうしたんだつて？――そんなら話してやらう。
レムメルマイヤト　何んにも云ふなよ。
オットー　僕もそうだ。――とんだ事つた。
メルヒオール　今直ぐにも君等が云つて呉れなきあ――
ローベルト　簡單に云つて見りや、モーリッツ、シティフェルの奴、評議室へ入り込んだのさ。
オットー　評議室の中へだよ。ラテン語の時間がすんでから直きにさ。
ゲオルグ　あいつ一番あとだつたんだ。何か目的があつて一番あとに殘つてゐたんだ。
レムメルマイヤー　僕が廊下の角をまがらうとした時に、あいつの戸をを開けるが見たよ。

メルヒオール　魔がさしたんだな――
レムメルマイヤー　あいつ魔さへさゝれなかけれりやなあ。
ゲオルグ　たぶん校長先生は鍵を置ばなしにしといたんだらう。
ローベルト　でなけりや。モーリッツ、シティーフェルの奴、合ひ鍵を持つてゐたかな。
オットー　そうかもしれないね。
レムメルマイヤ　あいつうまくいけば殘こされるだけですむだらう。
ローベルト　おまけに通信簿にや罰點を付けられるし。
オットー　そんな事で學校を追ひ出されでもしなきやあいゝにな。
ハンス、リロー　あいつ、あそこに！
メルヒオール　ハンケチの樣に眞白になつて
（モーリッツ非常に興奮してやつて來る）

レムメルマイヤー　モーリッツ、モーリッツ。何をやつたんだい。
モーリッツ　なんにもやりやしないよ――どうもしやあしないよ――
ローベルト　君は何んだか變だぜ。
モーリッツ　いゝ幸福なんだ、愉快なんだ――嬉いんだよ。
オットー　君は捕まへられたのか！
モーリッツ　僕は、及第したんだ。――メルヒオール、僕は及第したのさ！あゝ、もう、何かどうなつたつてかまふもんか！――僕は及第したんだ！――僕が及第するなんて誰も信じてゐやあしなかつたらう。！――未だ、ほんとだと思はれない位だぜ！――僕は其れを二十べんも讀み直したね！――僕は信じられない――ありがたい、そうなんだ、――實際なんた。僕は及第したゐた、（笑ひながら）解らないなァ――變だなァ――地面が廻る――メルヒオール。メルヒオール、君は僕がやつて來た事をやれるかい？

ハンス、リロー。おめでとう。モーリッツ。――うまくやつたんだもの喜べ喜べ。
モーリッツ　君にや解るまい。ハンス。君は、どんなに心配したか、想像できまい。此の三週間の間は、あの戸の所を通ると奈落へ落ちる入口見たいな氣がしたね。今日はね、そいつが少し開いてゐたのを見たんだ。僕は、誰れか百萬圓くれると云つたつて、――どうして、どうして、我慢出來るもんかと思つたね。――僕は室の眞中に立つて――報告帳を開けたのさ――頁をめくつて――見つけたね――そうやつてゐる間――僕は身がわくくふるへてゐた。
メルヒオール　そうやつてゐる間？
モーリッツ　其の間中僕の後の戸は、開けつ放なしさ。どうして出て來たか、――どうして階段を下りて來たか、自分にも解らないね。
ハンス、リロー　エルネスト、レイベルも及第かい？
モーリッツ　あゝ、たしかに、ハンスもたしかに、だよ、――エルネストレイベル

も及第した。

ローベルト　それぢや君は、正確に讀めなかつたんだ。出來の惡い奴は別にして君と、ローベルトを一所にすると僕等は六十一人になるぜ、それで上の級には六十人以上取らないんだよ。

モーリッツ　僕はたしかに、ちやんと讀んだんだよ。エルネスト、レーベルトは、僕と同じ點で及第してゐる――二人とも假及第だがね――一學期の間に僕等のどつちかが、席を讓らなけりやならないだらう。可哀相なはレイベルだ――あゝ僕は最う少つとも、まつかなくないや、僕は今度はまつたく深く考へてゐるんだもの。

オットー　君が及第すれば五マルク賭けやうか。

モーリッツ　一文も持つてゐないくせに。僕：君から金を取らうとは思はないね。――あ。だけど僕は今日から一生懸命に勉强するんだ！――僕は今だから云ふが

――君等が信じ樣と信じまいと――どつちだつていゝが、――僕は――僕は若し及第しなかつたら、自殺しやうと覺悟してゐるんだ。

ローベルト　法螺吹！

ゲオルグ　腰拔！

オットー　僕は自殺するのを見たいね。

レエムメルマイヤー　耳を打つてやれ。

メルヒオール　（彼れを掌で打つ）來いよ。モーリッツ。林務官の家へ行かうじやないか。

ゲオルグ　君はあいつの譫語を信じるかい。

メルヒオール　君に關係した事じやないじやないか。喋べらして置けよ、モーリッツ。來いよ町へ行かう。

（ハンゲルグルト教諭とクノッヘンブルと教諭とが通る）

クノッヘンブルヒ　ハンゲルグルトさん。私の生徒の中で、一番出來た子がこれがどうした譯か一番出來なくなりました。私にはとんと合點が出來ませぬ。

ハンゲルグルト　私にも解りませんなあ。貴方。

第五場

（日あたりよき午後メルヒオールと――ヴェンドラが、森の中で互に出逢ふ。）

メルセオール　やつぱり貴女だつたんだ、ヴェンドラさん。そんな所でたつた一人で何にをしてゐたの？――僕は三時間も森の向ふの方からこつちの方まで、歩いて居たが誰れにも會はなかつた。それだのに今貴女はあのこんもりした茂みの中から出て來たのに遇ふとはね。

ヴェンドラ　そうよ、私よ。

メルヒオール　若しも女が、ヴェンドラベルクマンさんだと云ふ事を知らなかつた

ら木から落ちた森の女神だと思つたでせうよ。

ヴェンドラ。いえ、いやよ、私はヴェンドラ、ベルグマンよ、――どうして貴方はここへいらしつたの？

メルヒオール　來たいと思つたから來たんです。

ヴェンドラ　私車葉草をさがしてゐるのよ。お母さんが五月酒を造らへたいとおつしやるんですもの。最初お母さんも一緒に來るつもりだつたんですが、いざといふ時に、バウエルお伯母さんがいらしつたの――お伯母さんは、山へのぼるのは大きらい――それだから私一人で來たのよ。

メルヒオール　車葉草は見つかりましたか。

ヴェンドラ　籠に一ぱい。あすこの丘の所で、撫の木の下に牧場のゲンゲ草の樣にたくさん生へてゐたのよ。で、いまね、出口をさがしてゐたのよ。私道がわからなくなつたらしいわ。もう何時でせうか。

メルルオール　丁度、四時半ちつと過ぎです。何時迄に歸るお積り。

ヴェンドラ　もつとおそいと思つてゐたわ。私小川のそばの苔の上でやすんで長い間夢をみてゐたのよ。そんなに早く時間が經つて、もう夕暮になつたんじやあないかと心配してゐたわ。

メルヒオール　誰も家で待つてゐないのなら最少しゆつくりなさいな。椎の木の下は僕の大好きな所さ。幹へよりかゝつて首をもたせかけて枝と枝の間から空を見上げてゐると誰れだつて睡むくなつて來るよ。地面は未だ朝日で暖つたかになつてゐるよ、――一週間ばかり前から僕は貴女に聞いて見たい事があつたんだが。

ヴェンドラ　だつて私五時には家へ歸つてゐなけりやならないんですもの。

メルヒオール　それじや、一緒に行きませう。僕が籠を持つて行つて上げらあ、籠を抛けて行きませう。そうすりや十分もあれば橋の所へ行けるから！――手枕をして、こんな風に横になると、誰でも妙な考へが起きて來る。

（二人とも椎の木の下に横臥する）

ヴェンドラ　あなたが私に聞きたいつて何あに。メルヒオールさん？

メルヒオール　僕はね、君が、貧乏な人の家をたづねては、食物や着物やお金をやるつて事を聞いたのさ。それは貴女は自分の意志でそう云ふ事をするのか、それとも、お母さんが貴女にさせるのか？

ヴェンドラ　大抵はお母さんがさせるのよ。その家族等つて云ふのは子供のたくさんある日傭人夫なのよ。時々父親が仕事が見當らなかつたりすれば家族等は凍えたり、飢えたりするわ。私の家には最ういらなくなつたものが　戸棚や箪笥にずつと前からたくさんあるんですもの、――だけど、どうしてあなた、それを知つているの？

メルヒオール　お母さんに云ひつかつたとき貴女はよろこんで行くのかい、それとも嫌々ながら行くのかい。

ウェンドラ　えゝ、私し喜んで行くのよ、――なぜ、そんな事聞くの。

メルヒオール　だつて小供等はきたないし、女等は病氣になつているし家は汚ならしいもので一ぱいになつてゐて、そのおやじは、貴女が働きもしないのを憎んでゐるんだぜ。

ウェンメドラ　うそですよ。メルヒオールさん。だがほんとうだとしてもやつぱり行くわ。

メルヒオール　どうして矢つ張り行くの。

ウェンドラ　私やつぱり行つてやるわ。あの人等を助けてやるのがとてもうれしいんですもの。

メルヒオール　それじや貴女は自分がいゝ氣持になりたいから貧乏人を見に行くんだね。

ウェンドラ　私はあの人等が可哀相だから行くんだわ。

メルヒオール　だけど、それがいゝ氣持でなかつたら行かないだらう。

ウェンドラ　どうしても私には、氣持のいゝ事なんですもの。

メルヒオール　それなら、其のおかげで天國に行かれるよ。一月前から僕が氣になつて仕樣がなかつた事はほんとうだつたんだなあ。――我がまゝ者にや、きたならしい、病氣の子供なんぞ見に行つたつてちつとも面白くないや。

ウェンドラ　でも、たしかに貴方にも、此の上もない樂しみになると思ふわ。

メルヒオール　それでも、そんな事をすりや、何時迄たつても浮ばれないよ。僕は其の事を、論文に書いて牧師のバストルさんの所へ送つてやろう。彼の人が、始めにやつたんだから。何故あの人は善行の悦びだなんて、僕等を馬鹿にしたんだらう。――若しあの人が僕に返事が出來なかつたら僕は最う日曜學校なんかに行かないし、確信式なども受けやしない。

ウェンドラ　どうしてあなたは心配ごとを、あなたの御兩親に御話しにならない

の？確信式はお受けなさい。頭をいためる程のものぢやないから。恐ろしい様な白い着物を着たり、長いズボンをはいたりしなかつたら、もつと精神的になれるのにねえ。

メルヒオール　犧牲なんかありやしない。自制なんかもありやしない。僕は善いことがあればよろこび、惡い事があればふるへたりうなつたりしてゐるだけなんだ貴女の髪の毛は搖れて笑つてゐるね、ヴェンドラベルグマン、僕がこんなに追ひ出され者の様にふさいでいるのに。君は小川のそばの草の中に横になつてゐた時どんな夢を見たのヴェンドラ。

ヴェンドヲ　――馬鹿々々しい事――つまらない事よ――

メルヒオール　眼を開けて居て？

ウェンドラ　私ね、私、貧乏な乞食の子になつてゐる夢を見たわ。それで朝の五時から町に追ひ出されるのよ。あらしの中を一日中粗暴な無慈悲な人等におもらひ

をしなければならないの、それで、夜家に歸つて來た時などにはお腹はへるし、寒くはあるし、ぶる〳〵震へて、まつて、それでも、お父さんが欲しいと思つた丈のお金を持つて來なけりや、打たれるのよ――打たれるのよ――

メルヒオール　僕は解つた。ヴェンドラ。貴女はつまらない小供の物語りを讀んだからそんな事を考へるのだ、そんな殘酷な人は居やあしないよ。

ヴェンドラ　そうでもないわ。マルタベッセルさんは、毎晩打たれるのよ。それだから明る日になつても其の打たれた痕が殘つてるのよ。まあ痛いでせうね。あの方のお話しを聽いた丈けでも體が暑くなつて來るわ。私ほんとうにあの方が可哀相で仕様がないわ。時々夜なんかに、其の事を考へて枕につゝ伏して泣く事があつてよ。一月も前からどうしたらあの方を助けられるか考へてゐるのよ。――私喜こんで、八日間もあの方に代つて上げてもいゝわ。

メルヒオール　誰か直ぐに親父を告訴すればいゝのに。そうすればその子は親父から引きはなされるのに。

ヴェンドラ　メルヒオールさん。私は今迄一度も打たれた事はないわ。――ただの一度だつて。私打たれるなんてどうなんふうだか、まるで想像も出來ないわ。自分でどんな風に感じるかと思つて自分で自分を打つて見たわ。――怖ろしい氣持でせうね。

メルヒオール　そんな事をしたつて子供がよくなるなんて僕には信じられないな。

ヴェンドラ　そんな事て、どんな事。

メルヒオール　打つたりなんかしてさ。

ヴェンドラ　ちよいとまあ、此の棒切でもいゝわ、まア、ヘナヘナしてゐて細いわ。

メルヒオール　血か出るよ。

ヴェンドラ　それでもつて一度打つて見たくはないこと。

メルヒオール　誰れを。

ヴェレドラ　私を。

メルヒオール　ヴェンドラさんはどうかしてゐるのね。

ヴェンドラ　どんなことになるかと思つてさ。

メルヒオール　まあ、靜かになさい。僕は打たりなどはしない。

ヴェンドラ　若し私があなたに打つてもいゝつて云つても。

メルヒオール　いやだよ。

ヴェンドラ　私が貴女にお願ひしてもいや、メルヒオールさん。

メルヒオール　貴女は正氣ぢやあないんだね。

ヴェンドラ　私、今迄一度も打たれた事がないんですの。

メルヒオール　そんな事をお願ひするなんて――
ヴェンドラ　どうか、――どうかやつて頂戴な――
メルヒオール　ぢやあ、やつて上げませう。（彼の女を打つ）
ヴェンドラ　まあ、私痛くも何んともないわ。
メルヒオール　さうか――こんなに着物を着てゐるんだもの――
ヴェンドラ　それぢやあ私の脚を打つて頂戴。
メルヒオール　ウェンドラさん、（前よりもつと強く打つ）
ヴェンドラ　あんたは撫でてゐるのね。撫でゝゐるんだわ。
メルヒオール　待てよ。畜生、身體から惡魔を打き出してやるんだ。
（メルヒオール　棒切を投げ出して握り拳で彼の女を打つ）ヴェンドラは恐ろしく叫び聲を出す、彼れは、それには少しも構はず、狂氣の様になつて打つ。其

の間、彼の頰には涙がひどく流れた。突然彼れは飛び退いて、兩手でこめかみの所を押さへて、苦しい心の底から叫び出す様に森の奥へ駈け込んでゆく。

集川 [illegible]

第一場

メルヒオールの勉強室の夜。窓は開けはなされてゐる。ランプが机の上にともつてゐる。――メルヒオールとモーリッツは、壁沿ひの長椅子にこしかけてゐる。

モーリッツ　さあ、又、僕は陽氣になつて來た、ほんの少し興奮しているが。――だけどギリシャ語の時間には耄碌したポリイフイムの樣に寢ちやつた。よくまあ古語の發音先生に小言を食はなかつたのが不思議なんだ。――今日はもう一足でおそくなるところだつたのさ――眼がさめた時に一番最初に考へたのはπついた動詞の事さ、――ヒンムメル――エルゴット――トイフェル――ドンネルウェッター――朝飯の時でも道を歩るいている時でも「眼がぼんやりする程動詞の變化ばか

りやつた。——三時過ぎて直ぐに寢初めたに相違ないや。本の中にペンで汚點を付けてしまつた。マチルデに起された時に、ランプが、とぼつてゐたし。窓下の叢林じや鶫が、愉快相に、チュ！〳〵云つてゐた。——そいで僕は何んとも云ひ樣のない陰鬱になつたんだ。それから僕はカラーをつけて、頭髪をブラシで撫でつけた。——人間は性に合はない事をやる時は、いやな氣持なもんだ。

メルヒオール　たばこを一本卷いてやらうか。

モーリッツ　ありがとう、僕は、吸はないや。——之から先も此のまんまで行つてくれさへすりやあなあ。目玉が飛び出る程うんと勉强してやらう——エルネストレイベルは休暇以來六度も失敗したよ。ギリシャ語の時に三度さ。クノッヘンブルヒの時二度と文學史の時一度。僕も始にや此んなこまつた目に五度もあつたが今日からは大丈夫だ。レイベルは自殺なんかしやしないよ。あいつにはどんな

事にもでも犧牲になつてくれる兩親がないもの、成らうと思へば軍人にだつて、牧丁にだつて、船乘りにだつて成れるんだ。若し僕が落第したら親父は大打擊をこほむるだらうし、母親はびつくりして、氣狂ひになるかも知れない。そんな風になつちややりきれないな。——試驗前にそんなつらひ思ひをしないでもすむ樣に肺病になる樣に神樣に願つたよ。けど、それも過ぎちやつた。が今でも、その後光が、遠くの方で光つてゐるんで夜でも晝でも眼をあけてゐられない樣だ。——だけどもう今度は鐵棒につかまつたんだから其の上へ、振り上れるだらう。若しおつこつたら俺の首がへし折れてしまうのは解りきつてゐらあ。

メルヒオール　人生なんてものは、くだらない平凡なもんだ。僕なんか搖籃の中で首を縊つてしまつた方が氣がきいてゐると思ふ。——どうしてお母さんはお茶を持つて來てくれないだらうな。

モーリッツ　お茶でも飲んだら氣持がよくなるだらう。メルヒオール。――僕は震へてゐる。僕は變に氣が立つてゐるんだ。ちよつと、僕にさわつてくれないか。見る事も、――聞く事も――感ずる事も非常にはつきりしてゐるのだけど、それでゐて尙、いろんなものが、夢の樣にしか思へないね。――あゝまつたく氣もちのいゝ夢の樣だ。――あそこの花園は月の光を受けて、何んて靜かに奥深かさうに廣がつてゐるんだらう。まるで永遠の世界にまで廣がつて行く樣だ。あの叢の下の方から何だか、わけのわからない物が出て來て草のない方へ忙がし相に飛んでゆくね。そして夕暗の中に見えなくなつて仕舞ふよ。まるで栗の木の下で、相談會でもある樣に思はれるんだ。――メルヒオール、僕等も、あすこへ下りやうぢやないか？

メルヒオール　お茶を飲む迄待つてゐやうよ。

モーリッツ　木の葉があんなにガサ〳〵云つてゐる。――僕にやまるで死んだ僕のお祖母さんが「首なし女王」のお話しをして下さつてゐる樣な氣がする、昔素的に奇麗な女王が居たんだ。太陽の樣に美しいといふか、まあ國中のあらゆる女の子よりも美しいんだ。唯ね、氣の毒な事にや、首がなしで生れたんだ。だから食べる事も出來なけりや、飲む事も出來ないし、接吻する事も出來ないのさ。宮中の事なんかは、其の柔らかい小さな御手だけでおとりになつたんだ。宣戰布告や死刑執行などは、その美しい御足で御命令になる。所が或る日の事、或る王樣が攻めて來て攻圍されちやつたんだ。ところが、その王樣は、偶然に二つの首があるんだ。それでその首が年から年中お巨ひに喧嘩ばかりしてゐて口もきいた事もないんだ。そこで宮中の魔術師が其の首の小さい方のやつを取つてそいつを女王の胴の上に置いたんだ。そうすると。どうだい。そいつが、また、ぴつたりと工合

よく女王に似合つたんだよ。そこでまあ、王様と女王とは結婚したんだね。それから其の二つの首はもう喧嘩もしなくなつて、お互ひに、額や、頰や、口に接吻したりしてそれからつてものは長の年月幸福に平和に暮したんだとさ。――何んて云ふ馬鹿々々しい話だらう！　休暇以來僕は其の首なし女王の事が頭からはなれないんだよ。奇麗な女の子を見ると、其の子に首がない樣に見えるんだ。――それから急に僕が其の首なし女王である樣な氣になるし――誰れにか僕の首を、も一つ載つけられる樣にも思ふんだ。

（そこへガポール夫人が湯氣の立つたお茶を持つて入つて來るそしてお茶をテーブルの上の、メルヒオールとモーリッツの前の所へ置く）

カポール夫人　さあ、お二人さん。一つおあがんなさいまし。今晩は、シュテーフェエルさん。いかゞですか。

モーリッツ　ありがとう御座います。カポールの奥さん。――僕は、あそこの下の方の踊を見てゐるんです。

カポール夫人　だけど、あなたは、いゝお顏色じやないわ。工合でも惡いんですか

モーリッツ　何んでもないんですよ。昨夜一寸かなりおそく寢たので。

メルヒオール　まあね、昨夜、夜明かしで勉强したんだつて。

ガポール夫人　そんな事を爲すつてはいけませんわ。シュテ　フェルさん。あなたお體を御大切になさらなけりやいけませんよ。健康と云ふ事もお考へにならなければ、健康をそつちのけにして勉强をなすつてもね。新鮮な空氣を吸つて充分に散歩でもなさい。あなたのお年位の時は、中等獨逸語の用法をお覺へるよりもその方がよつぽど大切ですわ。

モーリッツ　散歩をしませう。そうですね。散歩している間だつて勉强できますね

どうして僕はその事を考へなかつたかなあ。――書く勉強は家でやらなけりやならないけど。

メルヒオール　君は此處で書きものをやり給へ、その方が、二人にはずつと樂だよ――ねえお母さん、マックスフォン、トレンクが、神經熱病で死んだのを御ぞんじね。――今日のお午頃、ハンス、リローが校長先生の所へ來て、フォン、トレンクが自分の眼の前で死んだつて事を、云ひに來たんです。それで校長先生は、『そうか、お前は先週からやらなけりやならぬ二時間の留置をやつてしまひませんか、こゝに小使への書付がある、さあ。その事をみんな一度にやつてお仕舞ひ、級全體でお葬式に行くんです』つて云つたんです。――ハンスは物も言へない樣になりました。

カボール夫人　メルヒオールや。お前が持つてゐるのは何んの本です。

メルヒオール　フワウストです。

カボール夫人　もう、讀んで仕舞つたの。

メルヒオール　お終までは讀みません。

モーリッツ　丁度、ワルプルギスの夜の所です。

カボール夫人　私だつたら、そう云ふ本は一二年見合はせてから讀みますわ。

メルヒオール　お母さん、僕はこんな美しい事がたくさん書いてある本は他に知りませんもの。僕はどうして、其れを讀んではいけないんです？

ガーボール夫人　だつて、それを讀んでも解りやしないでせう。

メルヒオール　そんな事は、お母さんには解りませんよ。そりや此の本の內容を、十分に摑む事が出來ないと云ふ事は、よく解つてゐるんですが……

モーリッツ　儀等は、いつでも、二人で一緒に讀んでゐるんです。そうすると大變

解り易くなりますからね。

ガボール夫人　メルヒオール。お前はどんな事が爲めになる事か、惡い事か位、解らない年頃じやありませんよ。自分で一番いゝと思つた事を、おやりなさい。なんでもお前が、私にかくし事をしないといふわけなら、私は直ぐにもで承知して上げますよ。

私はね、唯お前に、かう云ふ事を前以つて云つて置いてあげたいのよ。どんな善い事だつても、ちやんとそれが解る様な年に成らなけりや、害になりますからね――そりやあ、私は、かへつて世間並な教育の法式よりも、お前の方に信用を置いてはゐますがね。――若し何んか用があれば、お前達は、私をよんでおくれよ、メルヒオールや。私は寢室に居ますからね。

（母親は出て行つて仕舞ふ）

モーリッツ　君のお母さんは、グレーチェンの事を話してゐるわけだなア。

メルヒオール　儀等は、グレーチェンの事を、ほん瞬間しか話してゐなかつたね！

モーリッツ　ファウスト自身でも、こんな冷淡に、彼の女を見捨てられやあしなかつたよ。

メルヒオール　此の傑作は、そんな不名譽なことで終つていやあしない！――ファウストはその娘と結婚することを、約束もしたらうし、また後でそれを見捨てもしたが、儀に云はせりやあ、少しも咎めるところはありやしない。グレーチェンは僕等の爲めに失戀して死ぬかも知れないよ。――でもねえ、しよつちう皆んなは之れを見たがつてゐるんだよ、すべて世の中は、要するにP――とV……とのめぐり合ひなんだからなあ！

モーリッツ　打ち明けて云へばね、メルヒオール君、儀は君の書いて呉れたものを讀

んでからは、そんな氣持ちに成つた。——休みになつたばかりの日に、あの書いてくれたものが僕の足もとに落ちてゐたんだ。僕はびつくりしたよ。それから戸を、びつたり締めて丁度梟が膽をつぶして、燃えてゐる森の中を飛び拔ける樣にちら〳〵する一行一行に目を通した。——大部分は目をつぶつたまゝで讀んだ樣な氣がするね。君の說明を見たので、ぼんやりした。いろいろの追憶が起て來たよ。少さい時の歌を、臨終の床で、聞かされたといつた工合に。僕は君が女の子の事について書いてくれたことには、ほんとに同情したよ。僕はとてもあの感じは忘れられないね。メルヒオール君。惡い事をするよも。惡い事をされる方がよつぽと氣もちがいゝね。此の世の中の幸福と云ふのは、自分に罪がなくつて、そういふ惡い事にあふ樣なものぢやあないかと思はれるね。

メルヒオール　僕は自分の幸福を、人から貰ひ度くないよ。

モーリッツ　だが、どうしてさ？

メルヒオール　戰つて取つて惡い樣なものなら、僕は何んにも欲しくはないんだ！

モーリッツ　それぢやあ、君はそれで面白いと思ふのか？——女の子が物事を樂しむのは、丁度神樣の樣なものだ。女の子が自分の身を守るのは、生れつきなのさ。死ぬ時まで、あらゆる苦しみを避け樣とするんだ。それは早く頭の上に天國が開かれるのを見たいからだ。女は、花の咲く天國を見た其の時でも地獄を恐がるもんだ。女の感情つてものは、岩の間から出る泉の樣に、きれいなものだ。まだ此の世の中の息が、かゝつてゐない盃を持つてゐる、それは、美酒の盃だ。其の酒が燃えてあふれてこぼれて仕舞ふ。——男が其の中に發見する滿足は無味乾燥なもんだ。

メルヒオール　いゝ樣に考へてゐたまへ。だが、君だけの考へにして置き給へ。

——僕はその事を考へたくはないや。

第二場　居間

ベルグマン夫人　（眞中の戸口から入つて來る。輝いた顏つきをしてゐる。帽子もかぶらないで、頭からマントを着て、片手には籠を持つてゐる。）

ヴェンドラ！　ヴェンドラや！

ヴェンドラ　（下着とコルセットのまゝで右の戸口の所へ出て來て）

何あに？　お母さん。

ベルグマン夫人　お前、もう起きたの？　まあ、お怜悧さんだこと！

ヴェンドラ　お母さん、もう行つてゐらしつたの？

ベルグマン夫人　早く着物をお着なさい！　——これから直ぐに、イナさんの所へ

行つて來るのですよ。その籠を持つて行くのですよ。

ヴェンドラ　（次の對話をしてゐるうちに、着物を着てしまふ）

お母さんは、イナさんの所へ行つてゐらしたの？　——イナさんは如何？——少しは好い方なの？

ベルグマン夫人　まあお聞きゝよ。ね、昨夜イナさんの所へ鶴が飛んで來てね、男の赤ちやんをつれて來てくれたのよ。

ヴェンドラ　赤ちやんを！　——男の赤ちやんを！　まあ、うれしいわね！　——それだから、あんなに長いことインフルエンザたつたのだわね！

ベルグマン夫人　いゝ赤ちやんよ！

ヴェンドラ　お母さん、私見たいわ。これで私三度目の叔母さんに成つたわね。——女の子が一人に男の子が二人の叔母さんにね！

ベルグマン夫人　あんな可い男の子はないよ！　――こんな、お寺の近所に住でねると、よくこんな事があるものです！　――明日で恰度二年目よ。イナさんがモスリンの着物を着て教會の段々を上つたのはね。

ヴェンドラ　鶴が赤ちやんをつれて來た時、お母さんは、そこに居らしつたの？

ベルグマン夫人　恰度飛んで行つて仕舞つたところだつたのよ。――お前、薔薇を付けないの？

ヴェンドラ　何故も少し早く行つてゐらつしやらなかつたの？　お母さん。

ベルグマン夫人　お前の所へも、何んか持つて來てくれたらうよ。――襟留か何にかね。

ヴェンドラ　氣まりが悪いわ！

ベルグマン夫人　だけど、ほんとに襟留を持つて來て呉れたのですもの！

ヴェンドラ　襟留なら澤山だわ……

ベルグマン夫人　それぢゃあいゝわ。ね。その他に何にか聞きたいの？

ヴェンドラ　私、鶴が窓から入つて來たんだか、それとも煙突から入つて來たんだか、それが知りたくて仕樣がないわ。

ベルグマン夫人　そりや、イナさんに聞いて見なけりや。さうね。イナさんに聞いて御覽。イナさんはきつと、よく、お前に話してくれるよ、イナさんは半時間の餘も、お話してゐたんだもの。

ヴェンドラ　私、行つたら聞いて見るわ。

ベルグマン夫人　いゝ子だから、忘れちやあいけないよ！　お母さんだつて、窓から來たか煙突から來たか、知りたいもの。

ヴェンドラ　でなけりや、私煙突屋さんに聞いて見た方がいゝかしら？　――煙突

屋さんなら煙突から飛び込んだか然うでないかよく知つてゐるわけだわ。

ベルグマン夫人　煙突屋さんなどに聞いてはいけません。ね。煙突屋さんなどに聞くのではないのよ。煙突屋さんなど鶴の事を知つてゐるもんですか！　解りもしないくだらない事を云ふので――何――何にをそんなにお前は通りの方ばかり見つめてゐるの？

ヴェンドラ　男の人、お母さん、――牡牛の三倍もある樣な！　――蒸氣船見たい足で……

ベルグマン夫人　（窓の所へかけて行きながら）

そんな事が！　そんな事があるものかね！

ヴェンドラ　（共れと同時に）

顎の下に寢臺を押へながら、「ラインの守り」を彈いてゐたわ――そこで、たつ

た今あの角をを曲つたのよ。……

ベルグマン夫人　お前、ほんとにお前は、何時迄も子供だね！　――お母さんは、お人よしだから、びつくりしますよ！　――帽子を取つておいで！　何時になつたら、いろんな事が分るのだらうね。あきれて仕舞ひますね。

ヴェンドラ　私だつて、お母さん、私だつて然うよ。こんなものが解らないんで情ないわ。――私には、お嫁に行つて二年半もたつ姉さんもあるし、私だつて三度目の叔母さんに成つたのに、どうしてそんな事になるんだか、ちつとも解らないのですもの。――叱らないでね。お母さん　叱つちやいやよ！　お母さんより他に聞く人が居ないんですもの！　話して頂戴なお母さん！　お話してね、お母さん！　自分にも恥かしいんですもの。どうかお話ししてね！　こんな事聞いたつて叱らないで頂戴。――どうして、そんな事が起きるの？　――どうしてそん

な風に成つて來るの？　――十四になつた私に、鶴の事を信じなさいつて云つたつて、お母さんだつて知つてゐらつしやるくせに。

ベルグマン夫人　まあ、お前、飛んでもない！　――何んといふ考へでせう！――そんな事、私にや云へませんよ。

ヴェンドラ　だけど、どうして出來ないの？　お母さん、――どう云ふわけで？――誰れだつてみんな喜んでゐることなんだから、いやらしい事じあないじやないの！

ベルクマン夫人　あ――あ困るね！　――私がいけなかつたのだが――着物を支度して、さ、早く支度しておいでなさい！

ヴェンドラ　えゝ行きますわ――そして煙突屋さんの所へ行つて、聞いてもよくつて？

ベルグマン夫人　まるで氣狂ひ見たいだね！　此處へいらつしやい、さ、此處へいらつしやい、なにもかも話して上るから――まあ、困つたねー　――今日だけは御免ね。ヴェンドラや！　――明日、明後日、來週――お前の好きな時にね。いゝ子だ事……。

ヴェンドラ　今日お話して頂戴よ、お母さん、今話して頂戴！　今直ぐ！　――お母さんがそんなに、おどろいて　らしやるのを見ると、お話しを聞かないうちは落ちつかないわ。

ベルグマン夫人　お母さんには云へませんもの。ヴェンドラ

ヴェスドラ　まあ、お母さん、どうして云へないの！　――私お母さんの所へ座つて膝の所へ、つつ俯してゐるわ。私の頭をお母さんの前掛で隱して頂戴。そして此のお室にたつた一人で居る樣に話して頂戴よ。私少しも動かずに、聲も立てな

いわ。どんな事があつても、ぢつと、我慢してゐるわ。

ベルグマン夫人　ヴェンドラや！――私の咎じやないよ。神様がそれをよくお知りだもの！――さあ、此處へお出！　いゝかい、どして子供が生れるのかそのわけを、話しますからね。――よく聞いてお居でなさい、ヴェンドラや――

ヴェンドラ　（母の前掛の下で）聞いてるわ。

ベルグマン夫人　（夢中になつて）

でも、いけないいけない！――そんな事話せやしない。お母さんは牢屋に這入らなけりやならない。――お母さんと一緒にゐられなくなつてしまひますよ。

ヴェンドラ　お母さん、しつかりして！

ベルグマン夫人　それじや、聞きなさい……？

ヴェンドラ　（前掛の下でふるへながら）

あゝ神様！　あゝ神様！

ベルグマン夫人　子供を生むのにはね――私の云ふ事が解りますか？　ヴェンドラ。

ヴェンドラ　早くさ。お母さん。――待つてゐられないわ。

ベルグマン夫人　子供の欲しい時はね――愛さなけりやならないの――男をね――結婚した男の人をね――愛するのだよ。解つたかい――誰でも一人だけ男を愛することが出來るのよ！　ありつ丈の心でもつて愛さなけりやあならないのだよ、そうだね！　何んて云つたらいゝかね！　その人を愛さなければならないのだよ。でもヴェンドラや、お前位の年頃にや、まだ愛することは出來ないがね――さあ、解つたらね！

ヴェンドラ　（起き上がりながら）

あゝ――ほんとに、恐かつた！

ベルクマン夫人　さあこれからね、お前はどんな目に遇ふかね！

ヴェンドラ　そして、それでお終ひ？

ベルグマン夫人　そうですとも！　さ、その籠を持つて、イナさんの所へ行つてお

いで。チョコレートやお菓子を戴だけるよ。――おいで、一寸見せて御覽、編み

上げ靴に、絹の手袋に、水兵服に、薔薇の花を頭にさして――ほんとに、お前の

着物も短かくなつて來たことねえ、ヴェンドラ！

ヴェンドラ　お晝の肉は取つていらしつて？　お母さん。

ベルグマン夫人　氣を付けておいでなさい――折を見て、下の方に襞を付けて上げ

ませうね。

第三場

ヘンス、リロー　（片手に燈火を持ちながら、後の戸を締めて、箱の蓋を開けて）

夜の祈りはすましたがデスデモナよ！　（懷の中からハルマ、ウェッキオのヴィーナ

スの複製を取り出して）――お前は、お祈りをした樣にも見えないね、ね。――

僕がヨナタン、シュレージンゲルの店飾り窓の中に、誰れか來るのを、思ひに沈ん

で待つて居たお前を見た時の、あの幸福を豫期してゐた時と變らぬ顏をしてゐる

ね。――このしなやかな手足や、この柔らか相に丸みがゝつた腰つきや、この圓

々と肥えた若々しい胸は、未だに引き付けられる樣だ。――十四歲のモデルを長

椅子の上に寢かして見た時、此の大家はいかに云ひしれぬ喜びに充たらう。

ほんのちよいとでもいゝから、夢でなりとも僕の所へ來てくれまいか？　僕は兩手を擴げてお前を迎へやうし、呼吸もつけぬ程接吻もして上げるよ。お前は僕と一所に棲むんだ。荒れ果てたお城の中の美しい王女の樣に、門も扉も、目に見えぬ手で獨りでに開くと、下の庭にある泉からは、さも面白ろさうに噴水が出る……

こう云ふわけだ！　――こういふわけなのだ！　僕の胸がこんなに鼓動がどき〳〵するのでも、お前を下らない氣まぐれで犯すのではないと云ふ事は分るだらう。淋しい夜な〳〵の事を思ふと、絞め殺されさうな氣がする。僕は此の心にかけてお前に誓ふか僕はお前が飽きたのではないよ。お前に飽きたとて、誰れが自慢になるものか！

だがお前は僕の骨の髓までも吸ひ取つたね。僕の背中を曲げても仕舞つたし、

僕の若々しい目から、輝やかしい最後の光までも奪つて終つた。――お前は人並みはずれておとなしいのに僕には馬鹿に横柄だね。そして動かぬ手足でほんとに僕をじらしている！　――お前か、それとも僕か！　そりや僕が勝を占めたんだ。

僕はそいつ等を數へる事が出來る――同じ樣な戰ひをした亡者共を數へられそうだ、――ワーマンのサイキがある――僕の子供時代の樂園の響尾蛇であつた細つそりした姿のマドモアゼル、アンゼリコの紀念だ。それからコレジオのイオ。ロッツオのガラテア。それからブウゲロオのキューピッド。ヴァン、ビーアスのアダ。此のアダは、僕の閨房へ一處にしてやらうと思つて、お父さんの秘書官の秘密な抽出しから盗み出したんだ。あとは、マッカルトの震えてゐるレダ。此れは兄さんの大學帽面の中から偶然見つけたんだ。――死に行く花たる美しい候補者のお前とで七人、その人等は夜見の國へと道しるべをしたんだよ。そんな事を、せめ

てもの慰めにしてくれ。そしてそんな果敢ない目つきで、可哀相に僕の苦しみを増さないでくれ。

お前が死ぬのは、お前に罪があつてではない。お前の死ぬのは、僕の罪の爲めだよ！ ——僕自身を庇護する爲めに、切ない思ひで七人目の妻殺しをやるんだ

ブラウバルトの後には、どこか悲劇的なところがある。彼れが殺した數々の妻達の苦しみを一緒にしても、一人一人殺して行く時の苦しみほどでは無いだらうと思ふ。

だがお前が、僕の寶石箱の紅絹の中に居なくなれば、僕の考へも落ちついて來るだらうし、身體もしつかりして來るだらう。お前の代りに、僕はボーデンハウゼンのローレライか、リンゲルの捨てられた女か、それとも、デフレッゲルの口にでも代りに入れてよろこんでゐやう。——そうしたら僕は、早く快くなるだらう！

だが三月も過ぎりや、お前のむき出しな魅する様な……に、バタの塊りが太陽に溶ける様に、僕の貧弱な頭はドロ〳〵に溶かされて終ふだらう。さあとう〳〵夫婦別れをしなきやならない時が來た。

ぶる、る、る僕はヘリオがパルスに成つた様な氣がする。Moritura me salutat（命を捧げた女がおれに挨拶する、——羅馬の兵隊がシーザーに挨拶する言葉より轉じて用ひたる言葉——譯者註）——少女よ、少女よなぜそんなにお前の膝を押し付けてゐるんだ？ ——今になつて何故だい？ ——未來永劫までも？ ——一寸でもいゝから動ごかしておくれ。そしたらお前を許して上げやう！女らしい感情で、情愛のしるしに、思ひやりのしるしにも、ね！ ——僕はお前を金の額に嵌めて、僕の寢床の上に懸て置くのに！ お前が操正しいばかりに、僕が不身持に成つたのが分らないのか！ ——情不知は、どうにでも成れ！——模範的な教育を彼の女が受けてゐたのは、誰だつて知つてゐる——僕だつてや

つばりさうだ。
今宵のお祈りはすましたかい、デスデモナよ？
胸がつまる樣だ。――氣がちがひそうだ！――聖アグネスだつて、やつぱり内氣な爲めに死んだのだ。それでねて、お前の半分ほども肌を出してはゐなかつた！　もう一度お前の櫻色をした身體に接吻さしてお呉れ――お前の子供らしくふくれた胸に――お前のほんとに丸々した――殘酷に思はれるお前の兩膝に――こう云ふわけだ。こう云ふわけだね。あ！
清い星よ！　僕はお前等には話せぬ！　こう云ふわけだ！……
（繪は底の方へ落ちる、彼れは蓋を閉める）

第四場

秣小屋

（メルヒオールは新しい乾草の中に仰けに寢ころんでゐる。そこへヴェンドラが梯子を上つて來る。）

ヴェンドラ　まあ斯んな所へ隱れてゐたの？　――皆んなが探してゐるわ。車が今出るんですよ。手傳つて頂戴な。暴風雨に成つて來るのよ。
メルヒオール　あつちへ行つて！　あつちへ行つて呉れよ？
ヴェンドラ　どうしたの？　――なぜ顏をかくしてるの？
メルヒオール　あつちへ行つて！あつちへ行つて！下の土間へつき落しちやうよ。
ヴェンドラ　私行かないわよ。――（メルヒオールの傍へ坐つて）どうして私と一所

に牧場の方へ出て行かないの？　メルヒオールさん。――此處は暑苦しくて薄暗いぢやありませんか。肌がしめつぽくなつて來るわ。あらどうしたんでせう！

メルヒオール　枯草の匂ひはいゝ匂ひだなあ。――外の天空は柩掛の樣に眞黑だらう――僕は君の胸に挿してゐるけしの花が光つてゐるのだけしか見えない。――それから君の心臟の音が聞こゑる――

ヴェンドラ　接吻しちやいやよ、メルヒオールさん！　――接吻しちやいやよ！

メルヒオール　君の心臟の――音がきこえる――

ヴェンドラ　愛する事になるわ――接吻をすれば――　――いやよ、いやよ！

メルヒオール　あゝ、ほんとうに、愛なんてそんなものがありやしない！　皆んな我が儘で、利己主義なんだ！　――君が僕を愛してゐないやうに、僕だつて君を愛してゐやあしない。

ヴェンドラ　いやよ……いけないわよ――……メルヒオールさん……

メルヒオール　あゝ、ヴェンドラ！　――

ヴェンドラ　あゝ、メルヒオールさん！……いけないわ、いけない――――――

第五場

カボール夫人（座つて、手紙を書いてゐる）

親愛なるシュテーフェルさん！

あなたのお書きになつた事について二十四時間考へに考へぬいて、重い心持ちで筆を取りました。私にはアメリカへ渡航なさる御費用を御用立する事は出來ません――私は固く御斷り申し上げます。第一、私はそんなにお金が御座いません

第二に、よしんば、持つて居りましても、そんな途方もない無考へな事に御盡力致しますのは、大變な罪惡だと思はれますもの。シュテイフェルさん。若しあなたが私の御斷り申上げたことを、不人情だと思召しになるなら、私を誤解なさるといふもので御座います。もし假りに私が、あなたの一時の思ひ違ひに、ついうかと惑はされて御用立でも致さうものなら、御母様らしいお友達としてそれこそ、私の義務をなほざりに致したと云ふことに成つて終ひませう。私はいつでも——あなたがお望みなら——御兩親様へ御手紙を差し上げませう。あなたは此の學期の間、出來る丈けの事は爲さいましたあなたのお力を使ひ盡してお終ひになつたので、此の場合に酷く吟味なさると云ふのは好くないばかりでなく、あなたの精神にも身體の健康にも大變に間違つた仕方かも知れません。私はこう云ふ事をあなたの御兩親に申し上げたいと存じます。

あなたが逃亡なさる事が出來ない場合には、御自身死んで御終なさると、暗に嚇かしなさるのは、正直に申し上げれば、私には聊か意外で御座いました。シュテイーフェルさん、身に覺えのないどんな不幸に逢つたとて、それから遁れやうと、決して不正な手段を取つてはいけません。いつも、御親切をとのみ致して參りました私に、おそろしい事をなさらうとするについて、責任を持たせ樣となさる御仕打は、ひがんだ方の目から見ますれば、脅迫と思はれる樣な所がありはしないかと思ひます。打ち明けて申し上げれば、あなたの御仕打として、こんな事は思ひもよらぬ事で御座います。——あなたは人は自分で責任を負はねばならぬと云ふ事を、よく御存知でしたのに。けれども最初に恐しい目にお逢ひになつた爲めに、御自身の爲さつた事を充分了解することが出來ないのではなからうかと、左樣私は確信して居ります。

それで私は此の手紙が、あなたの所へ達く頃には、御氣分もよくなつてゐられる樣に、望んで居ります。何事もあるがまゝに御受けなさいまし。私の考へでは若い方々を、唯學校の成績で判斷致しますのは、よくない事だと思ひます。學校に居る時には成績のよくなかつた生徒が、偉ひ人に成つたり、また此れと反對に成績がたいへんよかつた方が、世の中に出て、それほどでもないと云ふ例は、かなりたくさん御座います。何には兎もあれ、私の考へといたしましては、あなたの此の度の御失敗も、決して宅のメルヒオールとの御交友には、變りがないと云ふ事を保證致します、それよりか、私は、世間の方々が何んと申されても私が最も深く同情致して居りまする青年と、私の息子とが御交際致して居りますのを見ますのは、喜ばしく思つて居ります。

で御座いますから、シュテーフェンさん、あなたの頭を高く成すつて御いでなさい

まし！ ——此の位の災難は、誰にだつても御座います。そして直きに打勝てるもので御座いますもの。皆んなが其の度毎に、やれ短刀だ。やれ劇藥だのと申した日には、此の世の中に殘る者はなくなつて終ひませう。折り返へし御返事を下さいませ。變らぬ心からの愛をこめて。

お母樣としての お友達

ファンニイ、ガボール

第六場

朝日のさしてゐるベルグマン家の花園。

ヴェンドラ　お前は、どうしてお室からこつそり脫け出して來たの？ ——董を探さうと思つて！ ——だつて、お母さんが私を見て笑つていらつしやるんですも

の。——どうしてお前はもう、唇をちやんと結んで居られなくなつたの？　——ほんとに、知らないわ——どう云つていゝか分らないわ——まるで天鵞絨をしいた様な路ね。石ころもなけりや、刺もないし。——地べたに足が觸らないわ。——あゝ、昨夜はほんとによく眠られたわ！

こゝいらにあつたのよ。——私、聖餐の時の尼さん見たいに、まじめになるだわ。——まあ可愛らしい菫！　安心してゐらつしやいね、お母さん、私あの長い着物も着るわ。——あゝ誰れか來て呉れたら、其の人の首にかじり付いて、お話しをする人だけども！

第七場

（たそがれ。空には輕く曇がかゝつてゐる。低い灌木と雜草との間に路がうね

つてゐる。小川の流れる音が遠くの方に聞えてゐる）

モーリッツ　燒くそだ！　燒くそだ、なんでもいゝ、僕にや向かないんだ。ほかの奴は勝手に登りくらをするがいゝさ。僕は後の戸を閉めて、廣い世界に行くんだ——骨を折つて、ふり返へらなくつたつていゝんだ。

これまでだつて僕は思ふ様にはいかなかつたんだ今からそいつがどうなるもんか！——僕は神様と約束なんかして居やあしない。世の中の奴等にや、勝手放題にさせて置くさ　僕は、おさへつけられたんだ。——僕は親達に此の責任を負はせやうとは思はない。だが同時に、責任を負はなけりやならぬ様になるんだ兩親だつて相當年をとつてゐるんだから、自分等のやつた事は知つて居る筈だ。僕が生れ落ちた時にや、弱々しかつたんだ——でなきやもつと悧巧な人になつてゐたんだが、ほかの人等が先きに此の世の中に出て來たつて云つたつて、そん

な事は僕の知つた事じやあないじやないか！

僕は頭がどうかしてゐたに違ひない——誰かゝ僕に狂犬を贈物に呉れたら、僕だつて狂犬を呉れてやる。で若し其の狂犬を先方が受け取らなかつたら、其の時は僕だつて人間だものそれこさア……

僕はほんとに頭がどうかしてゐたに違ひがない！

人間はほんの偶然に生れて來たので、種々考へた來になんか生れて來るもんか——自殺する爲めにだ！

お天氣だけはそれでも考へ込んでゐる樣に見えらあ。朝雨にでもなるかと思はれたか、未だ雨にも成らない。——めづらしく、あたりは靜まつてゐる。何處にもぎら〳〵したものもなけりや、目障りになるものもなし、天も地も透き通つた網見たいだ。そして何もかも面白さう見にえるなあ。子守唄の樣に氣持ちのいゝ

景色だ。——『ねむれ、ねむれ、いとし子よ』つてスナンドウリヤさんが歌つた樣に。なぜあの人はあんなにおかしく肱を張つて歌つたんだらう！ ——僕が最後に踊つたのはツエツィリア祭（伊太利のツエツィリアにて音樂守護の女神を祭る祭日——譯者）の時だ。スナンドウリヤはいゝ相手とばかりしか踊らないんだ。——あの人の絹の着物は、前の方も、後の方も短かく切り落してあつた、——何んだか知らぬが短かつた。——きつと下着は着てゐなかつたんだな。……。そいつが何んだか僕を引きつけたんだ。——大部分は好奇心だつたな。——何んとも云へない心持ちに相違ない——丁度急流に押し流された樣な感じだ——決して誰れにも云ふまいが僕は中途半端にやつた事を、又繰り返へした。——でも、何んでもかでも知つてゐる樣な顏をしてやらう。——人間らしい事を知らないで、大きく成つたのは一番恥辱だ。——先生、あなたはエジプトからおいでになつて、金字塔を御覽になりません

でしたか！

もう今日は泣くまい。もう葬式の事なんか考へまい。——メルヒオールは僕の棺の上に、花輪を置いて呉れるだらう。牧師のカアルバウッフは僕の兩親を慰めて呉れるだらう。ゾンネンシュティッヘ校！ 、歴史上の例を引いて來るだらう。僕は墓石なんか造へては貰へない。僕は黒花崗の臺石の上に載つている、雲の様に白い大理石の瓶が欲しかつたんだ。——ありがたいことには、そんなものは無くてもいゝ。紀念碑なんかは生きてゐる人の爲めで、死んだ者には用がないんだ。

頭の中で、いろんな人達に別を告げやうとすりや、全一年もかゝりさうだ。もう泣くのは止さう。悲しい思ひをしないで、ふり返へられるだけでも愉快い。僕は、メルヒオールと、一所にどの位美しい夜を過したか知れないなあ！ ——川

柳の下だの、森番の家だの、菩提樹が五本立つてゐるあの高臺や、ルウネンブルグの靜かな城跡なんかで。——いよいよつて時が出たら、一生懸命になつてクリームの事を考へやう。クリームは腹に溜りやしない。腹一ぱいになつても、後へ美味い味が殘る。——僕は人間て奴は極端に惡いものと思つてゐた。だけど、誰れだつて皆んな、自分の最善を盡くして居ないものはありやしない。僕は今まで幾度か自分の身につまされた事がある。

僕は昔、エトルリアンの青年が、今はの際に兄弟達の幸福を祈つたつて云ふ其の青年の様に、祭壇へ迷ひ行くんだ。——一口毎に此の世の中を解放される氣味惡い恐ろしさを味ふ、僕は自分の運命が悲しさに泣いてゐる。——人生は僕に、冷たい肩を向けた。僕は遠くの方で熱心に、親しい目つきで、目くばせしてゐるのが見える。首なし女王、首なし女王だ。——兩手を擴げて同情が僕を待つてゐる

お前の説教なんか小供にするがいゝ、なあ、僕は自由通行券を持つてゐるんだ。若し貝殻が沈むと、それから蝶が飛び出る。もう妄想なんかにわずらはされるもんか。——君達あ、誤魔化さうとしてもそうはいかない。霧が晴れた。人生は趣味の問題なんだ。

イルゼ（ぽう〳〵の着物を着て、頭にや派手な布を巻いてゐる。後の方からモーリッツの肩をつかんで）

何にを無くなしたの？

モーリッツ　イルゼか！

イルゼ　こんな所で何を探してゐるの？

モーリッツ　何んだつて、そんなにおどかすんだい？

イルゼ　何を探してゐるのよ？　——何んか落ことしたの？

モーリッツ　何んだつてこんなに、おどかすんだい？

イルゼ　私町から來たのよ。——家へ歸るところなの。

モーリッツ、僕は何を落ことしたんだつけか、解らないんだ。

イルゼ　ぢや探したつて、何んにもならないわ。

モーリッツ　あゝ、あゝ！

イルゼ　私四日も家に歸らないのよ。

モーリッツ　音をたてないで、まるで猫みたいだなあ！

イルゼ　だつて舞踏靴を穿いてゐるんだもの——お母さんにお目だまだわ！——私と一處に家まで來ない！

モーリッツ　君はまた、何處をぶらつき歩いてゐるんだい？

イルゼ　ブリアビアさ！

モーリッツ　プリアビアだつて！

イルゼ　ノオルさん所、フエーレンドルフさん所、バディンスキイさんの所、レンツランク、スビューレルさんの所など丶、皆んな出來るつ丈行つたわ！　ちりん、ちりん、いろんな事が面白いわ！

モーリッツ　皆んなが君を描いたのかい？

イルゼ　フエーレンドルフさんはね、柱行者にして畫いたの。私はねコリント式の柱の上に立つてゐるのよ。フエーレンドルフさんは、そりや面白い人だわよ。此の間私、あの人のチューブを踏みつぶしちやつたの。そしたら私の髪の毛に、刷毛で繪の具をなすり付けたから、耳の所を、私ぶん毆つてやつたわ。あの人つたらね、私の頭にパレットを投げ付けたの。だが私ね畫架をひつくりかへしてやつたわ。そうすると畫を畫く時の杖を持つて、長椅子やら机やら椅子なんか飛び越えて畫室

の中を追ひ廻はしたのよ。暖爐の後にスケッチが一枚あつたからね――お止しなさらなけりや私此れを破りますよつて云つたら大負けに負けやるつてね。そしてそれからね、素速く私に接吻してしまつたわ。ほんとに私、おそろしかつたわよ。

モーリッツ　町に居る時、何處へ泊まつたんだい？

イルゼ　昨日はノオルさん所さ。――一昨日はボヨケーウィッチんさ所だつたし――日曜日にはオイコノモーブロスさんの所で、バディンスキーさんの所では三鞭を飲んだわ。ファラブレーゲスさんは、あの人の『ペストで死んだ女』を賣つたわ。アドラルさんは灰皿でお酒を飲むし、レンツさんは『小供殺し女』の歌を唄ふと、アドラルさんがギターを目茶に引くんでせう。私すつかり醉つちやつたんで、皆んなが私を寢かして呉れたわ。――――モーリッツさん、あんたまだ學校へ行つてゐるの？

モーリッツ　否、否、此學期からよしちやつた。

イルゼ　よかつたわね。あゝ、お金儲けをしてゐると、ほんとに日の經つのが早いわ！　――あなたは、私達と泥棒ごつこをよくやつたのを覺えて居て？　――ヴェンドラ、ベルグマンと、あなたとそれから私と、他の者達と、日が暮れると出て來て、私の家の山羊の暖かい乳を、よく飲んだわね？　――ヴェンドラさんはどうしてゐて？　大洪水以來、あの人に遇はないわ――メルヒ、ガボールさんはどうして？　――相變らず深く考へ込んでゐるの？　――私達はよく、唱歌の時間には、向ひ合ひになつたわ。

モーリッツ　あいつは哲學者めいた事を云つてゐらあ。

イルゼ　ヴェンドラさんは、つい此の間やつて來て、お母さんとこへ何かお土産を持つて來て呉れたわ。私ね其の日には、イシドオル、ランダウエルの所へ座りに行

つたの。あの人ね。私を子供のキリストを抱ひた聖母マリアにしたのよ。あの人はいやな人だわ。風見みた樣な！　――あなた二日醉をしてゐるわね？

モーリッツ　昨夜からさ！　――皆んなで河馬見たいに、うんと飲んじやつた。ヨロ〳〵家へ歸つたのが五時さ。

イルゼ　あなたの顏を見たゞけで、ちやんと解るわ。――女の子達も幾人かそこに居たの？

モーリッツ　アンダルジャのアラベラさ。あの酒食ひのね。亭主の奴一晩中待つてゐたつて、あの女だけしかよこさないんだもの。

イルゼ　モーリッツさん、あなたの顏に書いてあつてよ！　――私は二日醉つてどんなもんだか知らないわ。去年の謝肉祭の時なんか。三日三晩も寢床へ入りもせず着物もぬがなかつたわ。舞踏會からカフエーへさ、晝間はベラヴイスタで、宵の

口にやティングルタング、夜に成ると舞踏會さ。レナも居たし、肥つちよのヴィオラも居たわ。——三日目の晩にハインクッヒに、めつかつちやつたの。

モーリッツ　ハインリッヒは、君を探してゐたのかい？

イルゼ　あの人でつば私の腕に躓いたわ。私生氣もなく往來の雪の中に、倒れてゐたんだからね。——それがあの人と一所に行つた譯よ。十四日間もあの人の下宿から他へ行かなかつたわ——ひどい目にあつたわ！　朝になると、あの人のペルシヤ寢卷をひつかけてね。夜に成ると、小姓の黑い着物を着せられて室の中を歩き廻るし、首にも膝にも、手頸にも飾を付けられてさ。毎日毎日、いろんな風をして寫眞を取られるしね——アリアドーネの樣にソッファの上に寢かしたり、レダの樣にしたり、ガニメッドにして見たり、女のネプコドノゾオルだつて四つん這ひにしたりなんかするし、そうしといて、やれ人殺した、銃殺だ、自殺だ、石炭瓦斯

だなんて大騒ぎをしてね。朝つぱらから、床の中でピストルなんか持つて、彈丸を皆んな詰めて私の胸に差し向けてさ！　一寸でも動いて見ろ、そしたら打ちまうぞ！　——まあね。モーリッツさん、打たれたでせうよ、ほんとに！　——そうして今度は、火吹竹見たいにそれを口にくわくて、——それで自分の生命の惜しいのが分つて來たのよ。それから——ブルルル！　脊骨を打ち拔かれたかも知れないわ。

モーリッツ　ハインリッヒは未だ生きてゐるのかい？

イルゼ　どうだか知らないわ！　——寢床の上に大きな鏡が箝め込みになつて居たわ。室が塔みたいに高く見えて、オペラハウスの樣にきら〳〵光つてゐたわ。人がね、天から身體がぶら下つてゐる樣に見えるのよ。私恐い夢ばかり見たわ。——ほんとに、夜が明けて呉れさへすりやあつと思つたわ！　——おやすみ、イルゼ

お前が眠つた時、殺すのはいゝだらうなあだなんて！

モーリッツ　そのハインリッヒは、未だ生きて居るのか？

イルゼ　いゝえ、生きて居るもんですか！――いつか、ハインリッヒがアブサンを飲みにみ出かけた時に、外套を引つかぶつて往來へ飛び出しちやつた。謝肉祭がすんだ後の事よ。私ね警察の手に捕まつてさ。男の着物なんか着て一體どうする積りなんだつてな事になつちやつてね。――とう〳〵本署へつれて行かれちやつたわ。其處へノオルさんや、フェーレンドルフさんや、バディンスキイさんや、スピューレルさん、オイコノモブロスさん、ブリァピァさんなんて連中が一處、こたに來て呉れて、放免さして呉れたの。そこで辻車へ乘つけて、アドラルさんの書室へ連れて行つて呉れたわ。それから連中の事を聞く樣になつたのよ。フェーレンドルフさんはお猿さんで、ノオルさんは豚で、ボヨケーウァッチさんはみゝずく、

ロイゾンさんが鬣狗で、オイコノモブロスさんが駱駝さ。――そいだから、私あの連中は皆んな同じ樣に、可愛がつてやるわ。他の人なんか少しもかまひ付けやあしない。世界中が大天使や金持ちばかりに成つたつて！

モーリッツ　僕は歸らなけりやならないんだ、イルゼ

イルゼ　私と一處に家まで來ない？

モーリッツ　何しに？――何故？――

イルゼ　暖かい山羊のお乳を飲みにさ！　私あなたの頭の毛を燒いて上げて、首の廻りに小さい鈴を、ぶら下げて上げるわ。――そうすれば私等も、あなたと小馬に乘つて遊ぶ事か出來るわ。

モーリッツ　僕は歸らなけりやならないんだもの。僕はまだザッサニイデ朝のことや。山上の說敎の事や、並行六面體の事なんかを考へなきあならないんだ。――

イルゼ、さよなら！

イルゼ　おやすみなさい！　――メルヒオール、ガボールと私が仲直りをしたあの家へ、あなた今でも行つて！　――ふるる！　あなたがお嫁さんを持つまで、私しや藁の中にでも寢てませう。（驅けて行つて終ふ）

モーリッツ　（獨りになつて）一言云つてやるだつたな。――（呼んで）――イルゼ？

イルゼ！　――あゝもう聞こゑないや。僕はそんな氣分ではないんだ。――こんな時にやはつきりした頭と愉快な心持ちが欲しい。――いゝ機會をのがしたなあ！　――僕の寢床の上にもすばらしい鏡があるつて事を、云つてやるんだつたなあ。――おてんば娘だつてどうとでもしてやるんだが。――僕はそいつに、長い黑の絹靴下をはかせて、黑い專賣特許の革の靴をはかせ、長い黑い手袋と、首の廻りに黑のビロードを卷かせて、絨氈の上を僕の前に立たせて、えらさうに

歩かしてやらあ――むしやくしやして來た時にや、蒲團のでもつて息も出來ない樣にしてやるつて、云つてやればよかつた。アンナ話しに成つて來ると僕は笑つちやうな。――僕はどなり出すな！　――どなれ！　――どなれ！　おい、イルゼ！　――ブリアビア！　――無神經！　――力を取られて了ふ！　――此の幸福の子、大陽の子――悲くなつてゐる所に出て來た、あばずれ女め！――あゝ！――あゝ！――

――――――――――――――――――――――――――――

（川岸の草のたくさん生えてゐる中で）

ひとりでに又此處の所へ出て來ちやつた。――芝生の腰掛のとこだ。毛蕊花が昨日より見ると大きく成つた樣だなあ。柳の間から見ると、やつぱり同じこつた――川の水は鉛の樣にどろ〳〵重く流れてる。忘れちやあいけない。（ポッケット

の中から、ガボール夫人の手紙を取り出して、それを燃やす)。——火の子が散る——こゝにもあすこにも、上の方にも下の方にも——人魂だ！　——流星だ！

僕が火を付ける前にや、草も見えたし、地平線上の光も見えてゐたのに、——今しゃあ真暗だ。もう僕は二度と家へは歸らないんだ。

第三幕

第一場

評議室。――壁にはペスタロッチとジャン、ジャックルツソオの肖像とが掲げてある。

アッフェンシュマルツ、クニュフベルディック、フンゲルグルト、クノッヘンブルヒ、ツンゲンシュラアタ、フリーゲントードの諸教授が、綠色の被布ひをかけた机の廻りに、座つてゐる。其の上の方にはたくさんの瓦斯の火が燃えてゐる上座の一段高い席には校長ゾンネンステイッフェが居る。小使のハーベバルトが戸口のそばに蹲んでゐる。

ゾンネンスティッフェ　何にか別に御意見のある方は御座いませんか？――皆さん！　私共の學校の惡い生徒を、放校せねばならぬ事を、何故文部省に申請致しますかについては、相當に重大な理由がありますので、致し方も御座いません。申請せねばならぬ理由と致しましては、既に我々が蒙りましたる不幸を、償はねばならぬからであります。それから又、將來に於きまして同一の禍を、未然の內に防がんければならぬと云ふ理由もありますし、此の不良學生が、同級生全體に及ぼしましたる墮落腐敗の影響につき、此れを懲罰せなければならぬ爲めでもあります、で、就中、かの不良なる生徒が、殘つて居ります後の同級生の上に、同一の惡影響を及ぼすことを防がん爲めであります。それから皆さん、これは最も重大なる理由で御座いますが、それはあの樣な失態に關しましては、いかなる口實非難をも打消さねばならぬと云ふ事で御座います。何故と申しまするに、近來各

種中學校に蔓延して居りまする所の、自殺流行の害毒から、我々の學校を保護致しますのは、我々の義務でも御座いませう、今日までの所にては、いろ〳〵と敎員諸氏が其の事について手段を施こさうと企てましても、敎育の進歩を知らしめる事をすら嘲笑して居る樣な有樣で御座います。――何か別に御意見は御座いませんでせうか？

クニッペルディック　私はどこか窓を一つ位開けてもよい時分だと云ふ確信を、最早抑へて居る事が出來なくなりました。

ツンゲンシュラーク　こ、こ、此處には、塹、蠶窟のなな、な、かの、よ、よ、ような、以前のヴェッツラルの法院長の、官、官、官房の樣な、空、空、空、空氣が淀つて居ります。

ゾンネンスティッヒ　ハーペパルト！

ハーベバルト　御用で御座りますか、校長先生、
ゾンネンスティッヒ　一つ窓をお開けなさい、ありがたい事に外には新鮮な空氣がいくらでもありまするぞ。――どなたもほかに御意見は御座いませんか？
フリングトード　同僚の方々が窓を一つ開ける事をお望みでしたら、それについて少しも異存は御座いません。唯膈はくばば、開けらるゝ窓が、私の直ぐ後の窓でない事を希望致しまあす。
ゾンネンスティッヒ　ハーベバルト
ハーベバルト　御用で御座りますか、校長先生。
ゾンネンスティッヒ　他の窓をお開けなさい！――ほかに最早御意見は御座いませんか？
フンゲルグルト　敢て論辯を致す次第では御座いませんが。あちらの方の窓は、秋

の休業以來塗り潰されて居りました事を思ひ出したいもので御！　す。
ゾンネンスティッヒ　ノーベバルト！
ハーベバルト　御用で御座りますか、校長先生。
ゾンネンスティッヒ　そちらの窓は閉まつたまゝにして置きなさい！――此れは投票に問ふ必要があると思ひます。論議になつて居ります窓を開けることに贊成なさられるお方は、起立して下さい。（數へる）一、二、三、――一、二、三、――
ハーベバルト！
ハーベバルト　御用で御座りますか、校長先生。
ゾンネンスティッヒ　あのまゝ窓は閉めて置きなさい、私としましては此の室の空氣は此まゝにして置いてもよいと云ふ意見を持つて居ります！――別に御意見も御座いませんでしようか？――我が校の不良なる生徒を放校致す事を、文部省に申請

致さなかつたと致しますれば、其の時には文部省としては、此の不幸なる出來事に對しまして、我々に責任を問ふて參りませう。自殺病流行に見舞はれました各中學校の中で、自殺者が二割五分にもなつたものは文部省から閉校を命ぜられました此の恐るべき打擊を蒙らざるやうに、我が校を救ふと云ふことは、守護者とし又維持者として、我々の義務であります。皆さん、此の困つた生徒を何にか他の點で以つて、其の罪を、相當處理してやれぬといふ事は、甚だ遺憾なる事であります。其の際我々が、其の不良なる生徒を辯護致す樣な、寬大な處置に出づると云ふことは、目下非常なる危機にありまする狀態を、何等救ふ道にならぬではないかと思はれます、罪のある者を、判決する場合には、我々は罪のない者としなくてはいけないと思ひます。——ハーベバルト！

ハーベバルト　御用で御座りますか。校長先生！

ゾンネンスティッヒ　あの生徒を連れて來なさい！

（ハーベバルト出て行く）

ツンゲンシュラーク　もしこ、この空氣を現狀のまゝで少しも差し支へないと致しますならば、夏の休、休、休暇の間にほかの窓を塗り潰す樣な事を、提議致したいのであります。

フリーゲントード　若し我が敬愛する同僚の、ツンゲンシュラーク君が、此の室の空氣の流通が充分でないと思はれるならば、我が敬愛する同僚ツンゲンシュラーク君の頭の中に、通風器を造つたらよいと云ふ事を提議致します。

ツンゲンシュラーク　私は我慢が、出、出來ません！——わ、わ、わ、わたしは無禮に、我、我、我慢が出來ません！——私だとて、五、五、五感が働いてゐます。

ゾンネンステッヒ　私は、敬愛するフリーゲントード、ツンゲンシュラーク兩君に禮節を重じて戴きたいのであります。不良なる生徒は、今や階段を昇り來たる樣であります。

（ハーベバルトが戸を開けると、そこへメルヒオールが、青い顏をして、それでも平氣な樣子で、會議の前に現はれる）

ゾンネンスティッヒ　卓のそばへ來なさい！――スティーフェル氏は息子の不埒な行爲に氣が付くと氣も狂はんばかりになつて、どうにかして、此の忌はしい行爲の原因を知らうと思つて、モーリックの遺留品をよく調べました所が、思ひもよらぬ所で、書類を發見したのです。もつとも其の書類で、此の不埒な行爲を了解する事は出來ないのですけれど、此の不心得者の、道德を無視した事を、充分に說明致します。此の書類は、對話體本になつて居ります『婚姻のねむり』と題されたもので、實物大の淫猥なる挿畫があり、長い說明が二十頁にもなつて居つて、あらゆる不心得者が猥褻な考へを滿足させる樣な淫らな書類であります。――

メルヒオール　私は――

ゾンネンスティッヒ　默つてお居でなさい！――スティーフェル氏は、其の問題の書類を我々に渡して呉れました。そこで我々はどんな事をしても、書いた者を探し出して見ませうと猥猥した父親に約束しました。それから不埒者の同級生の手蹟を集めてよく〳〵比べて見たのです、そして敎員諸君の滿場一致を以つて、習字の擔任の先生の判定をも此れに加へて、お前さんの手蹟に最もよく似てゐると思つたのです。

メルヒオール　私は――

ゾンネンスティッヒ　默つておいでなさい！――此の類似してゐると云ふ事は、動

かす可からざる根據によつて明白に認められて居るにも拘らず、尙一層しらべねばなりません、第一此んな道德に反した事を行つた動機について、其のため生じた自殺事件と關聯しても委しく、訊問せねばなりません。

メルヒオール　私は——

ゾンネンスティッヒ　お前さんはこれから、私が順々に尋ねる質問に對して、ちやんと、明瞭に丁寧に、『はい』とか『いゝえ』とか答へねばなりません。——ハーベバルト！

ハーベバルト　御用で御座りますか。校長先生。

ゾンネンスティッヒ　口供書を取つて下さい！——フリーゲンビート書記さん、今から、なるべく言葉通りに口供書を取つて戴きたいのです。——（メルヒオールに向つて）此の書き物をお前さんは知つてゐるだらう？

メルヒオール　はい。

ゾンネンスティッヒ　誰れが書いたものだかお前さんは知つてゐるだらう？

ヒルヒオール　はい。

ゾンネンスティッヒ　此の書類はお前さんの手蹟ではないか？

メルヒオール　はい。

ゾンネンステッヒ　此の淫猥な書類を書いたのはお前さんだね？

メルヒオール　はい。——先生、其の中のどんな所が淫猥であるかを指摘して下さい。

ゾンネンスティッヒ　お前さんは、私が云ふ質問に對して明瞭に、愼んで『はい』とか『いゝえ』とか答へればよいのです。！

メルヒネール　私は、先生方皆さんが、よく知つて居られる事を、書いたゞけなの

です。

ゾンネンスティッヒ　此の不知恥者！

メルヒオール　此の書類の中に、道徳に悖つた事がありますなら指摘して下さい！

ゾンネンスティッヒ　お前さんは私を、おちやらかさうとする氣なのか！――ハーベバルト――

メルヒオール　私は――

ゾンネンスティッヒ　お前さんは教員會議の尊嚴に、少しも敬意を拂はうとしない な。お前さんが、道德界に屬する人間の羞恥の感情を、正しく辨へないのと同じ事だ！――ハーベバルト

ハーベバルト　御用で御座いますか。校長先生。

ゾンネンスティッヒ　まるで語根連通の萬國語を三時間に速習する樣なものだ。

タルヒオール　私は――

ゾンネンスティッヒ　フリーゲントート書記さん、口供はこれで終りに致しませう。

メルヒオール　私は――

ゾンネンスティッヒ　お前さんは默つておゐでなさい！――ハーベバルト！

ハーベバルト　御用で御座ますか。校長先生。

ゾンネンスティッヒ　此の生徒を連れて行つて下さい！

第二場

雨の降りしきつてゐる墓場。――牧師のカァルバウフが、堀つた墓穴のそばに洋傘を片手に持つて立つてゐる。其の右手に、レンティエル、スティーフェル

其の友人のツイーゲンメルケルと叔父のクノッヘンブルヒが居る。左手の方にはクノッヘンブルヒ先生と一緒に校長のゾンネンスティッヒが居る。學校の生徒等が輪を作つて列んでゐる。マルタとイルゼが少し離れた所に、倒れた墓碑の上に立つてゐる。

カアルバウフ牧師　永遠の天父が罪の子に祝福して下すつたお惠みを拒む者は、精神的に死なねばなりません！――然し、自から肉に溺れて、神様の光榮を拒んだものは、肉體的に死なねばなりません！――けれども慈悲深き神様が眞に罪の上に御置き下さる十字架を擲つものは、永遠に死に赴かねばならぬといふ事を皆さんに申し述べます。（そう云つて墓穴の中に一すくひの土を投げ入れる）――けれども、我等をして棘多き道を安全に歩み得る爲めに、慈悲深き主をたゝへ、感謝せしめ給へ。神は此の如き者に三重の死を與へ給ふと同樣に、正しき者をば幸福

なる永遠の生に導き給ふのであります。

レンテル、スティーフェル　（涙でもつて聲も出す、墓穴の中に一すくひの土を投げ入れて）あの子は私の子のやうではなかつた！――あの子は私の子の樣ではなかつた！――あの子は子供の時から厄介ばかりかけてゐた！

ゾンネルスティッヒ校長　（墓穴の中に一すくひの土を投げ入れて）自殺が世界の道德的秩序に對して、此の上もない罪惡であると云ふ事は、世界の道德的秩序を守る此の上もない證明であります。自殺者は社會の道德的秩序に宣言を下す手數を省かせ、又其の存在を實證するものであります。

クノッヘンブルヒ教師　（墓穴の中に一すくひの土を投げ入れて）やくざ者、――墮落、――放蕩、――腐敗、――零落め！

プロブスト叔父　（墓穴の中に一すくひの土を投げ入れて）子供が親に對して、こん

なひどい事をするつて事を、僕は、おふくろから聞いたが、そんな事を信じなかつたがなあ。

友人のツインゲンメルチル　（墓穴の中に一すくひの土を投げ入れて）朝から晩まで二十年間も、我が子の事ばつかりしか考へてゐなかつた父親を、こんな目に遇はせるなんてなあ！

キアルパウフ牧師　（レンテル、スティーフエルに握手をしながら）哥林多前書第十二章から十五章にあります通り、神様を愛する方々には、又種々なる事が、好く成ります事も解つて居ります。――子供を亡くした母親の事を思ひ出して上げなさい。それから二人分の愛で、悲しんで居るのを、慰さめて上げる様になさいませ。

ゾンネンスティコヒ校長　（レンテル、シュティーフェルと握手をしながら）實際、我々

は息子さんを進級さして上げる事が出來なかつたんです。

クノッヘンブルヒ教師　（レンテル、シュティーフェルと握手をしながら）それで若し我々が進級さして上げた所で、來春にはきつと落第する事が解つてゐたんですからね。

プロベスト叔父　（レンテル、シュティーフェルと握手をしながら）君も最早今となつては、第一君自身の事を考へなけりやならぬ義務があるよ。君は一家庭の長なんだから――

友人のツィーゲンメルケル　僕の云ふ事を信じて呉れ給へ！――こんないやな天氣の時にや、腹の中が引くりかへるよ！――酒でも飲まないじやあ、心臓が止まつちまふね。

レンテル、シュティーフェル　（鼻を鳴らしながら）あの子は私の子供の様ではなかつ

た。——あの子は私の子供の様ではなかつた！

（レンテル、シュテーフェルは、カアルバウフ牧師や、ゾンネルスティッヒ校長や、クノッヘンブルヒ教師や、プロブスト叔父や、友人のツインゲンメルケルに伴はれて去つて行つた。——雨は止む。）

ヘンス、リロー　（墓穴の中に一すくひの土を投げ入れて）成佛し給へ、君は正直だつたなあ！——僕の犠牲になつてくれた思ひ出多い花嫁御に、よろしく言つて呉れ給へ。それから慈悲深い神様にも、よろしく頼むよ。——えゝおい大將！——天使の様に罪のないことだから、お前の墓石の上にや案山子でも立てゝ呉れるだらう。

ゲオルグ　ピストルは見つかつたかい？

ローベルト　ピストルなんか探す必要はないよ！

エルンスト　ローベルト君、君はモーリッツを見たのかい？

ローベルト　うるさい、やかましやだなア！　誰れが見るもんか——誰れが見る？

オットー　隠されて居たんだぜ——あいつの上にや布巾をかぶせてあつたぜ。

ゲオルグ　舌を出して居たかい？

ローベルト　目さ！——だから布巾が掛けてあつたんだ。

オットー　氣味が悪るいね！

ヘンス、リロー　モーリッツは、ほんとに首をくゝつたのかい！

エルンスト　首が無くなつてゐたつて皆んな然う云つてゐたよ。

オットー　馬鹿々々しい！——そんな事があるもんか！

ローベルル　ほんとうなんだよ。——巾がかけてない首くゝりは今迄見た事がないよ。

ゲオルグ　普通の死に方は出來なかつたのかなあ！

ヘンス、リロー　何を云つてゐるだい！　首くゝりつていふ奴は、なか〳〵いゝもんだぜ！

オットー　あいつは、僕に五マルクの借りがあるんだ。賭をしてゐ、落第しやしないつて誓つたのさ。

ヘンス、リロー！　あいつが、斯んな事になつたのも君に責任があるんだ。君はモーリッツの事を、威張やつて云つたぢやないか。

オットー　くだらないな！　僕だつて毎晩徹夜で勉强してゐるぜ。モーリッツだつて希臘文學史を研究したら、首くゝりなんかしなくつてもよかつたんだがなあ！

エルンスト　オットー君、君は作文を造つたかい？

オットー　最初の序論だけさ。

エルンスト　僕は何にを書いていゝんだかてんで分らないや。

ゲオルグ　アッフェンシュマルッが課題を出した時、君は休んだのかい！

ハンス、リロー　僕は、デモクリットの中から、何にかひつ張り出してやるんだ。

エルンスト　僕はマイエルの小百科字典に何んかしらあつたら見やうと思ふ。

オットー　明日のヴァージルはやつたかい？——　——　——

（學生等は行つて終ふ——マルタとイルゼが墓の傍へやつて來る）

イルゼ　早く、早くいらつしやい！——あそこへ墓堀りが來るわ！

マルタ　イルゼさん、待つてゐた方がよくわない？

イルゼ　なあぜ？——新しいのを持つて來たのよ。いつでも取りたてのばかりよ！

まだたくさん咲いてゐるのよ。

マルタ　そうねえ、イルゼさん！――（マルタは常春藤の花輪を投げる。イルゼは前掛を廣げて、棺の上に摘みたてのアネモネの花をたくさん振りかける）

マルタ　私、薔薇を掘つて來るわ。ひどひ目に遇ふでせうけれど――こゝならきつとよく根付くわよ。

イルゼ　私此處の所を通る度に、水をかけてやるわ。私は、川岸から菫を摘んで來ませう。家からも、いくらか百合を持つて來るわ。

マルタ　奇麗でせうね！　奇麗だわよ！

イルゼ　私が恰度橋の向に渡つた時に、鐵砲の音が聞こえたのよ。

マルタ　可哀相に！

イルゼ　私だつて其の理由は知つてゐるわよ、マルタさん。

マルタ　あなたにモーリッツさん何んか話して？

イルゼ　平行六面體！　だけど誰れにも話しちやいけないわよ。

マルタ　大丈夫よ。

イルゼ　此處にピストルがあるの。

マルタ　それだから、あの人等は此れが見つからなかつたんだわ！

イルゼ　私しがね、朝通りかゝつた時に、モーリッツさんの手から直ぐに取つちやつたのよ。

マルタ　それを私に頂戴な、イルゼさん！――どうか私に頂戴よ！

イルゼ　いゝえ、私かたみに此れを取つて置く積りよ、

マルタ　イルゼさん、あの方の首が無くなつて倒れてゐたつて、ほんとうなの？

イルゼ　きつと水を詰めてゐたんだわ！――王様の蠟燭が一面血だらけになつてゐ

たわ。腦味噌が牧場のあたりに散々に飛んでゐたわ。

第三場　ガボール夫妻

カボール夫人　學校じやあ身替りが欲しかつたんでせう。方々であんなに何にか云はれては、どうにも仕樣がありませんから。その時、丁度いゝ所へ家の子が間が惡く首を突込んだんですわ。私は生みの母親として、そんなひどい事など手傳へるものですか？――いやなことですわ！

カボール氏　十四年間、僕は默つてお前の精神的敎育を見てゐたんだ。僕の考へとは反對でつた。私は子供は平常も玩具じやなくつて、もつと眞面目な事を要求してゐると云ふ事を確信してゐたんだ。だけど僕は、自分で考へてゐるんだが、兩親の內いづれか一人の愛情と慈悲とが、他の嚴格な主張と相代り得る場合には、

其の嚴格な主張よりは愛情とか慈悲とかの方が迎へられるに違ひない。――ファンニイ、僕はお前を責めるんじやあない。けれども私が子供に對して、二人の間違ひを正さうとするんだから、邪魔をしてはいけないよ。

カボール夫人　私に溫い血の一滴でも通ふてゐるうちは、貴方のお邪魔をします。私の子供が感化院に入れられたら、臺なしの人間になつて終ふでせう。惡い事をする樣な性質を持つてゐるなら、そんな所で、よくなるかも知れません。解りませんけれど。いくらいゝ人間だつて、植物が大陽や光線をさへぎつてしまつた時の樣に、きつと惡くなつてしまふと思ひます。平常の樣に、今だつて私は、あの子は性格だつて正しいし、思想だつて氣高いと思つて天に感謝してゐます。あの子がどんな怖ろしい事をしたと云ふんです？　あの子の辯解なんかする所があるもんですか――ですから學校を追ひ出さ

れたつても、あの子の罪ではありませんわ！　よしんば、あの子の罪だとしても償ひは付いてゐますもの、貴方は私よりよく知つてゐらつしやるでせう。理論的にも正しく知つてゐらつしやいます。けれども私は、たつた一人の子供を強いて死なせになどやれません。

カポール氏　そりや、問題が違ふよ、ファンニイ。私等が幸福を求め様とするのは、一種の冒險だ。弱くつて進んで行けないものは、路傍で休むさ。そしてお終ひに來る可き時が來たとしたところで、仕方がない事じやあないか。そんな事は無いだらうがね！　理性が助けて呉れる限りは、迷つて居る者を、力づけてやる事は私等の義務さ。――學校からあの子が、追ひ出されたと云ふ事は、あの子の罪じやあない。よしんば學校を出されないとしたつて、やつぱりあの子の罪じやない！――お前はあんまりのんきだ。お前は人格つて云ふ物を、根本的に論じ様と云ふ

時に、つまらない微細な事を考へてゐるんだ。女つて云ふ者は、こんな事を判斷する事に慣てゐないんだからね。メルヒオーが書いた様な事を書く者は、どいつだつて心底から腐つてゐるんだ。問題は明らかなもんだ。多少でも健全な者ならこんな事を爲るものか。私等は聖人ではないよ。私でもお前でも、眞直な道を、ふみはづす事はあるよ。ところが、あいつの書いな事は、根本を誤つてゐる。何かの間違ひでつい横道にそれたと云ふ様な所は、まるでありやしない。恐ろしいほどはつきりと書いてある。それが自然的本能と云ふか、まあ不道徳な、道德を無視する様な傾向を現はしてゐる。あんな淫猥なものつて、まあ我々法律家の言葉で『沒道德狂』と云ふてゐる、異常な精神的腐敗を示してゐるのだ。――此の場合に何とかする事が出來るか。私には何とも云へない。若し私等が一縷の希望を持たうと思ひ、又其の兩親として潔白な良心を持つてゐやうと思ふなら、此の

際大に決心して熱心に事に當らなければならない。——これ以上云ひ合ひは止めようじやないか、ねえフアンニイ！　お前がさぞかし、つらからうと云ふのも、私にはよく解る。お前は本來、あれと氣か合つてゐるんで、あの子をあんまり可愛がり過ぎてゐるんだ。せめて今度は、子供の爲めに自分と云ふものを度外してしつかりやらなければいけない。

カポール夫人　まあ、どうしてそんな事が出來ます！——男でなければ、そんな事は云へませんわ！　男でなければ、そんな死んだ文字に拘泥しで、自分を盲目にする事は出來ませんわ！　男でなければ、解り切つた樣な事が、解らない譯はありませんよ。私はメルヒオールが生れた時からどうかして好く成る樣にと、よく考へて育てゝ來たんです。だつてあの子は、周圍の事に感じ易い樣に見えたんですもの。私等は偶然の出來事にでも、責任を負はねばならないでせうか？　例へば

明日にでも屋根から瓦があなたの頭に落ツこちて來たとして御覽なさい。そうしてそこへ御友達がやつて來て——いゝえあなたの御父さんの方がいゝ、そして介抱をして下さる代りに、あなたを足蹴にする樣なものです！——私は我が子を見殺にする樣な事はできません。だつて實の母親ですもの。——どう考へたつて解らないわ！　そんな事は信じられません！　それじや一體、メルヒオールが何にを書いたつて云ふのです！　そんな事をするのは、何より無邪氣な證據ぢやありませんか！　頑是ない證據だし、子供らしい罪のない證據ぢやありませんか！　誰れだつて人間の知識なんてものは、解るもんじやありません。——此んな時に道にはづれた汚行だなんて騒ぎ出すのは、魂のぬけたお役人か、さもなけりや量見の狹い人ですわ！——何んとでも云ひたい事を仰つしやいまし。でも若しメルヒオールを感化院に、御入れになると云ふなら　私は御ひまを頂戴します。世界

中探しまわつても、何うにかしてあの子をそんな可哀相な事から助けてやる方法を講じます。

カボール氏　お前も我慢をしなさい。――若し今日がいやなら、明日でもいゝさ。誰れだつて不幸と折合ひをつける事は、生優しい事じやあないよ。私はお前の味方にならう。そしてお前の勇氣が挫けたら、どんなに骨が折れても慰さめて上げやう。何んだか將來が灰色の樣だ。暗憺としてゐる。――たゞお前が、私を置いて行つて終ふと云ふ事はしないで呉れ。

カボール夫人　私は二度とあの子に逢へないでせう。もうあの子に逢へません！あの子だつてそんな下賤な事にや堪えられないでせう。じつと辛抱してはゐないでせう。今に束縛を破つてしまふでせう。もつと恐しい先例があれの目の前にあるでせうから！――二度ともうあの子に逢へません――ああ、ああ、あの快活な

心――いかにも可笑い樣な笑ひ方――何にもかも――善い事にも惡い事にも、勇ましく戰はうとする小供らしい決心――あゝ、此の朝の空　私は私の出來る丈の『善』として、あの子の心持が快活で純粹である樣にと願ひます！　その償ひとして罪に問はれるなら、私を引き出して下さい！

カボール氏　、、あれは惡い事をしたんだ！　私を引き出して下さい！　どうとても、あなたの恐しい御手は、あの子に下さないで下さい！　私が罪を負ひます。――でも、あなたの爲さりたい樣にして下さい！

カーボル夫人　あの子は惡い事をしたんではありません！

カーボル氏　、、あれは惡い事をしたんだよ！――お前の際限のない可愛がり方を、もう少し加減して呉れればよかつたんだが。――今朝一人の恐ろしく興奮して口もきけない樣な婦人が此の手紙を持つて私の所へもつて來たんだ。此手紙つてのは、

其の婦人の十五になる娘さんに宛たものだ。その婦人は、娘さんが家に居なかつたので、格別氣にもしないで開封したんだ。——ところが手紙には、メルヒオールが其の十五になる娘さんに向つて、自分のした行爲は疚しやくてたまらぬし、あなたに對して罪を犯した。云々、とそれから自分が當然罪を負ふべきだと書いてあるんだ。その婦人は、よしんばその結果を解つたとしても、惱み悲し　事も要らぬ。すでにあの子は、救はれる方法がついてゐる。それは學校を放逐されたのが何よりだ。濟んだ間違ひは、却つて娘の幸福にもなるんだ。——こんな無分別な眞似は尙ほの事だ。

ガボール夫人　飛んでもない！

ガボール氏　此の手紙は贋物だ胡魔化しだ。あの子の放校されるのが知れ渡つてゐるもんだから、誰かそれを利用しやうとしているのだらう。私は未だあれに話し

て見ないんだ。——でも此の手蹟を見て御覽——書き入りを御らん！

ガボール夫人　まあ今までにない何んて惡戯をしたもんでせう！

ガボール氏　私もそれを心配したんだ！

ガボール夫人　いえ、いえ、そんなこと、そんな事はありません！

ガボール氏　それなら結構なんだがね。——その婦人は兩手をもみながら、どうしたものでせうと私に聞くんだ。私はその婦人に、十五にもなる娘さんを枯草小屋などへ、放つて置いちやいけないと云つてやつたんだ。いゝあんばいに、その婦人は手紙を置いてゐつた。——たとい我々がメルヒオールを他の學校へやつたところで、親の監督が屆かないんだから、三週間もすれば、同じ樣な結果になつてしまふ。——また放校だ。——快活な心も、しばらくすればそれにも慣れてしまふ。——ねえ、フアンニイ、あれを何處へやつたものだらうね？

ガボール夫人　感化院へ――

ガボール氏　何處へ――？

ガボール夫人　感化院へ！

ガボール氏　感化院へ行けば第一そこには、家では與へられなかつた事がある。嚴格な仕つけ、嚴則、それから、どんな事をしても服從しなけりやならない道德的な抑制。――然しお前が考へてゐる樣に、感化院と云ふものは怖しい所じやあない。まあ基督敎徒的な思想や感情の發達と云ふ上に、重きを置いてゐるのだ。終ひにや、あれだつて快樂を求めない樣になつて、善行に從ふ樣になるだらう。そして自然。本能を主としなくなつて理法が重んずる樣にもなるだらう。――三十分程前に兄から電報を受け取つたが、それを見るとあの婦人の述べた事が確かにうなづかれるんだ。メルヒオールは兄に賴んで、英國へ高飛びしやうと二百マルク借り出さうとしたらしい――

ガボール夫人　（顏を掩ふて）まあ、どうしませう。

第四場

感化院。――廊下。――ディートヘルム、ラインホールド、ルブレヒト、ヘルムート、ガストン及びメルヒオール。

ディートヘルム　さあ貳拾ブァヱニッヒの銀貨だよ！

ラインホールド　そいつを何うしやうつて云ふんだい？

ディートヘルム　俺が此處へ置くのさ。それで此の周りに皆んなで輪を造つて、當てた奴にこいつをやるんだ。

ルブレヒト　メルヒオール、お前も入らねえか？

メルヒオール　僕はたくさんだ。

ヘルムート　石部金吉！

ガストン　あいつは、何んにも出來ねえんだよ。あいつは品行直しに來てゐるんだ。

メルヒオール　（ひとりで）あいつ等と一所にならずに、ひとりぼつちに成つてゐるのはつまらないな。皆んな僕を目に立てゝゐる。僕も仲間入りをしやう――でなきや死んでしまはあ。――閉ぢ込められてゐると自殺する樣に成つちまふ――此の首の根を打ち折つたら、いゝんだが！――それとも逃げ出して終へば、そいつも亦いゝな！　僕はきつとやれるな。ルブレヒトは仲間に成るだらう。あいつは此處でも話せる奴だ。――僕はあいつに、ユダの息子の嫁タマルの話しと、モアブの話しと、ロットと共の身寄りの者の話しと、ヴァシュ　テイ女王の話しや、

ースエムのアビザークの話をしてやらう。――ルブレヒトは、あいつ等の中で一番氣の毒な人相をしてゐる。

ルブレヒト　俺が當てたぞ！

フルムート　俺だつても！

ガストン　明日の事だらう。

ヘルムート　なに直ぐだよ！――いゝかい！　あゝ神樣！――

皆々　大出來だ――甲上だ、すてきすてき！

ルブレヒト　（銀貨を取つて）どうもありがとう！

ヘルムート　やい、犬野郎！

ルブレヒト　なんだい豚！

ヘルムート　首絞り奴！

ルブレヒト　（ヘルムートの顔を毆つて）どうだ！（かう云つて驅けて行く）

ヘルムート　（ルブレヒトの後を追ひ驅けて行く）野郎、叩き殺ろしてやるから！

他の者等　（後から驅けて行きながら）　やれやれ！　追つ驅けろ追つ驅けろ！やれやれ！

メルヒオール　あそこに避雷針が下つてゐる。――あれにハンケチを捲き付ければいゝな。――僕はあの娘の事を考へ出すと、いつでも頭に血が上つて來る。そしてモーリッの事を思ふと足が鉛のやうになる。――僕は新聞社へ行かう。若し僕に月給を呉れるなら、呼び賣りもやらう！――探訪でも――書く事でも――地方掛りでも――倫理記事でも――心理學的な事でも――何にをしたつて今日、食つて行けない事はない。公衆スープ施給所、カフェー、テムペランス――あすこの家は高さが六十尺もあつて、漆喰が剝け落ちてゐる――あいつ等は僕を憎んで居る

んだ――僕が自由をきかせないもんだから僕を憎んで居るんだ。仕たい放題勝手な事をやつてやるんだ。惡い事だつて何んだつてかまふもんか――なに大丈夫月日の過つうちにやだんだんに、――もう八日たつと新月だ。明日は一つ、蝶番ひに油を塗つて置かう日曜の晩までに、誰れが鍵を持つて居るんだか探ぐつて置かなきやならない。日曜の晩お祈りをして居る時、癲癇になるんだ。――だけど誰れか他の者が病氣に成らないでくれりやいゝがなあ！――もう其場に臨んだ樣にはつきりそんな事が目の前に浮ぶ。窓の敷居の上なんか。わけなく上れるし――それから飛んで――それで捉ると――だけど、あすこへハンケチを捲いて置かなければやならない。――あそこへ院長が來たぞ。（左手へ去る）

（ドクトル、ブロクルステルが錠前屋を一人つれて右手の方から入つて來る）。

ドクトル、ブロクルステル　此の窓は三階になつてゐて、此の下に蓊麻が植えてあ

るんだが、しかし墮落した者などには、莽麻ほど何んとも思はないからね！——昨年の冬、一人の子供が屋根窓から這ひ出した。それで私等はその子供を追つ駈け廻して、捕まへて來てから、又押し込めて終つたが、隨分骨が折れたよ——

錠前屋　格子は鍛鐵に致して置きませうか？

ドクトルブロクルテス　鍛鐵がよろしいな——それを釘付けにして置いたら、脱き取る事は出來まい。

第五場

寢室。——ベルグマン夫人、イナ、ミュッレルと醫師ドクトル　フオン、ブラウゼブルヴェル。ヴェンドラは床に寢てゐる。

フオン、ブラウゼルブルヴェル博士　それでは御嬢さんは御幾歳つに御成りですか？

ヴェンドラ　十四歳と六ヶ月になります

フオン、ブラウゼルブルウェル博士　私はこれで十四年間も、ブラウト製の丸藥を用ひて居りますが、大抵の場合に其効果は非常によいのです。先づ肝油だとか鐵劑酒などよりは此れを御進め致しますね。最初は一日三粒乃至四粒を御飲みになり、漸次增して行つてもよろしいのです。フオン、ヴッツレベン男爵令嬢フロイライン、エルフリーテさんに、三日に一粒づゝ增して行く樣にと申して置きました。男爵令嬢は私の申した事を誤解なさつて一日に三粒づゝ增したのです。するとやつと三週間で、まあ御母樣についてビィルモントへ轉地療養に御出かけになる事が出來る樣になりました。——どしどし御歩きになつて見たり、間食する樣な事もよろしいでせう。よう御座いますねお嬢さん、どんどん運動をやつて食慾が進むように

（ベルグマン夫人は戸口まで一緒に行く）

ナ　（窓の所で）　まあ、お前の牡丹がまた咲いたわね。――寢床からあれが見えて？――盛りなのはほんの少しの間だから、眺めて樂しむひまもありやしない。直さに散って終ふんですものね。さあ、私もこれから直ぐに行かなけりやならないわ。ミーレルが、郵便局の前で待って居るのよ。その前に仕立屋にも寄って行かなきやならないし。初めてムッキィの半ヅボンが出來るの、カールも冬着の編脛衣が出來るのよ。

ヴェンドラ　私ね、時々うれしくつてしやうがないことがあるのよ。――何んでも面白くつて、日光の樣にきら〳〵してね。こんな心持ちに成れる事なんかあらうとは、思はなかつたわ。！　私外へ行き度くなるのよ。黄昏の中を牧場の向ふの方へ行きたくなるわ。川邊にそつて櫻草を摘んだり、土提の上に坐つて考へたり

しなければなりません。――そうすれば此の心臟の動悸も直さに止みます。――それから頭痛も、寒けも、眩惑も――それから此の恐しい消化不良も皆んな直つて了ひます。フォン、ヴッツレーベン男爵令嬢フロイライン、エルフリーテさんは、治療を始めてから八日たつと、もう朝御飯に新しい皮芋を添えて雛つ子の丸燒にした肉を、みんな召上つて終ひました。

ベルグマン夫人　先生、葡萄酒をお一つ如何で御座いますか？

フォン、ブラウゼルブルヴェル博士　いやありがとう御座いますが、奥さん、車が待つて居りますから。――決して御心配には及びません。なあに二三週間もたてば御嬢さんも羚羊見たいに、又愉快に跳ね廻る樣になられます。御安心なすつて御いでなさい。――奥さん、さよなら、お嬢さん、さよなら、皆さん、さよなら――さよなら。

して見度くなるわ。——そうすると今度は齒が痛くなつて來るの、そしてね、明日の夜明には死んで終ふんだと云ふ樣な氣に成るのよ。熱くなつたと思ふと冷えて來たり、目の前が眞暗になつて終つて、そうなると體の中に淺ましい物がさわぎ出て來るのよ。——私が目を醒ますと、其度んびにお母さんは泣いて居るのよまあ、ほんとに悲しくなるわ。——私だつて話が出來ないわ、イナさん！

イナ　枕をもつと高く上げなくつていゝ？

ベルグマン夫人　（戻つて來て）先生のお考へでは、直きに吐き氣も直るでせうつてそうしたら靜かに起きられるのよ。——ヴェンドラや、お母さんだつてお前さんが早く起きられる樣になつたら、どんなにいゝかと思ひますよ。

イナ　此次私が御見舞に來る時にや、最早家の中を跳ね廻る樣になつてゐるでせうね。——お母さん、さよなら、私これから仕立屋まで行つて來なくつちやならな

いの。ヴェンドラや、大事にしてね。（ヴェンドラに接吻をして）早く、早くよく成つてね！

ヴェンドラ　姉さん、さようなら。——次にいらつしやる時には、櫻草を持つて來て頂戴ね。さようなら、赤ちやんによろしくつてね。

（イナは歸つて行く）

ヴェンドラ　お母さん、お醫者樣は、外でお母さんに何んな事を仰しやつたの？

ベルグマン夫人　何んにもお仰らあしませんよ。——先生はね、フォン、ヴッツレーベンのフロイラインも、やつぱり昏睡狀態になつたんですつて仰つてゐらしつたのよ、大抵、萎黃病つて云ふのは、そんな風なんですとさ。

ヴェンドラ　お母さん、私は萎黃病だつて仰つて？

ベルグルマン夫人　御前ね、食慾が出て來たら牛乳を飲んで、肉や野菜を食べなけ

りやあね。

ヴェンドラ　ねえ、お母さん、お母さん、私萎黄病じやないと思ふわ。

ペルグマン夫人　お前は萎黄病ですよ。安心してお居でなさい、ヴェンドラや、安心してね、萎黄病なんですから。

ヴェンドラ　いゝえ、お母さん、そうじやなくつてよ！　私知つてるわ。私萎黄病じやないんだわ。水腫れか來たんですもの——

ペルグマン夫人　萎黄病ですよ。先生は確かに萎黄病だと仰つたんですもの。ね、安心して居らつしやい。今によくなるんだからね。

ヴェンドラ　よくなんか或らないわ。私水腫なんですから、お母さん、私死ぬんだわ——ね、お母さん、私死ぬんだわ！

ペルグマン夫人　お前に死なれてどうします！　死なれてどうなりますかね！——

ほんとに、死なれてどうなるもんですか！

ヴェンドラ　だげど、ぢやあ、お母さんはどうしてそんなに、悲しさうに泣いて居らつしやるの？

ペルグマン夫人　お前に死なれてどうします！　ね、お前は水腫じやないんだよ。お前にはね赤ちやんが出來るの！　お前には赤ちやんが出來るのです！——あゝどうしてこんな事を、お前はして臭れたのかね！

ヴェンドラ　私はお母さん、どんな事もしないわ！

ペルグマン夫人　ヴェンドラや、もう何んにもかくさずにね！——お母さんには何もにかも、知つてゐるんだから、お母さんは、お前に一言云つて置けばよかつたんだけれど、それが出來なかつた。——ヴェンドラや、ねえヴェンドラや——

ヴェンドラ　お母さん、そんな事は無い事よ。未だ結婚なんかしないんだし……

ベルグマン夫人　まあどうしやう――お前は結婚はしないけれど、つまりそこなんだよ！　だから尙更困つてしまふね！――ヴェンドラ、ヴェンドラ、ヴェンドラ、何んて事をしてくれたんだらうね!?

ヴェンドラ　知らないわ、私何んにもほかに知らないわ！　私達は枯草の中で寢たのよ……お母さん、私世界中でお母さんより外に誰れも愛する樣な人なんかねないわ。

ベルグマン夫人　まあお前はね――

ヴェンドラ　ねお母さん、何故、何も彼も皆んな、お話して下さらなかつたのよ！

ベルグマン夫人　ね、ね、ね、もうお互ひに、心配させつこなしにしませう！　安心してゐらつしやい！　ね、私の氣をいら立たせないでお呉れよ。十四に成つたばかりの娘にそんな事を云へますか！　御天道樣が無くなつて、そんな事は云へやあ

しない。私はお母さんがして下さつた通りに、お前にもして上げただけなんだわ。――ねえ、ヴェンドラや、私達は神樣を信じませうね。お慈悲に、すがりませう。そして私達の爲なければならない事を爲なければなりません！　ねえ、まだ何んにも起きたんじやあないんだし。そうして私達が、ぐず〳〵してゐ樣もんなら、神樣に見捨てられ了ひますよ――しつかりして、ねヴェンドラ、しつかりしてね！――誰れでも兩手を組み合はせて、窓際の所にぢつと座つてゐると、そのうちに何んでも皆んな、善くなつて了つて、今まで胸が張り裂ける樣な思ひもなくなるものよ。――な、なぜ、お前は震へてゐるの？

ヴェンドラ　誰れか戸を叩いてゐるわ。

ベルグマン夫人　お母さんには、何んにも聞こえなかつたよ。（戸の所へ行つて開けて見る。）

ヴェンドラ　だけど私あんなにはつきり聞こえたんですもの――誰れが居るの？

ベルグマン夫人　誰れも居やあしません。――あらまあ、ガルテン街のシュミッドおばさんだわ。――シュミッドおばさん、ほんとにいゝ所へおいでになつてね。

第六場

（葡萄畑に多勢の男や女の葡萄摘みが居る。――太陽は西の方の山の頂に沈まうとしてゐる。澄み渡つた鐘の音が、谷間から聞こえて來る。ヘンス、リローとエルンスト、レーベルが、差し出てゐる崖の下で積み重ねてある乾草の中に寢ころんでゐる。）

エルンスト　僕は馬鹿に働いちやつた。

ヘンス　くよ〳〵云ふなよ！――時間の過つのが惜しいぢやないか。

エルンスト　あんなにぶら下つてゐるが、もう駄目だよ。――そして明日は皆んな潰されるんだもの。

ヘンス　すつかり疲れたし、腹がぺこ〳〵にへつちやつた。

エルンスト　おゝそうかい、僕は最早食べられないや。

ヘンス　此の透き通つたムスカッテルを一房どうだい！

エルンスト　僕は最早駄目だよ。

ヘンス　僕があの蔓を曲げれば、蔓の方から口へ垂れて來らあ。僕等は二人共ぢつとしてゐればいゝんだ。二人して粒々を皆んな食つちやつたら、後の莖を幹の方へ跳ね返へしてやるのさ。

エルンスト　なか〳〵物事つて云ふものは決しられないもんだ。やつと決めたと思

ふと又、今迄消えて居た力が盛り返して來るもんだね。

ヘンス　ほら天が赤く燃えてゐらあ――そして夕べの鐘が鳴つてゐらあ。――僕は最う先きの事なんかあてにしないんだ。

エルンスト　時々ね、僕は、こう馬鹿にえらい牧師になつた樣な氣になるんだ――氣立の優しい奥さんがゐてよ、書齋にや本がいつぱい詰つてゐてさ。どこへ行つても威張られるのさ。六日の間は考へて、七日目には說敎をするんだ。散步にでも出かけりゃ、學校の子供達にや手を貸してやるし、それから宅に歸れば熱い琲珈はあるし茶菓子が出る、庭木戸の所から女の子か林檎を持つて來て呉れると云ふわけなんだ。――君はもつと何んか奇麗な事を想像出來るかい？

ヘンス　僕は半分閉ぢた睫毛と、半分開けた唇と、土耳古の織物とを想像するね。――僕は情熱なんて云ふのは全く信じないんだ。僕等の先輩なんか、自分達の馬

鹿な所を隱さうと思つて悲しそうな顏付してゐるじやないか。お互同志じや、丁度僕がやつて居る通り、馬鹿呼ばりをやつてゐるんだ。僕はそいつを知つてゐるんだ。――僕は大金持なら、神樣に紀念碑を建てらあ。――將來の事を、砂糖と肉桂の入つたミルクセーキだと思つて見給へ。或る奴はそいつをひつくり返へして泣くし、又或る奴はそいつを攪拌してゐるしさ、なぜ上皮を掬ひ取らないんだか？――まあでも、今に分る樣になつて來るとは思ふだらう？

エルンスト　上皮を掬つて食ふか！

ヘンス　殘つたやつは、牝鷄が食ふだらう。――そう考へちまやあ、いろんな苦しい事から頭だけでもぬき出した樣に樂になるんだ。

エルンスト　上皮を掬つて食べるか、おい！――何んだつて笑つてゐるんだい？

ヘンス　又始めたな？

エルンスト　たつて、どつちか先さに始めなきやあならないもの。
ヘンス　今日から三十年もたつてね、今日の様に、晩に、此んな事を思ひ出したら、奇麗にこつたらうな。
エルンスト　おや、何んでも考へ出せるんだね。
ヘンス　そりや然うさ！
エルンスト　若し一人ぼつちにでもなつたら——泣き出したく成るだらうな。
ヘンス　くよ〳〵云ふなよ！（エルンストの口に接吻する。）
エルンスト　（ヘンスに接吻して）
　僕は君と話しをしたら、すぐに歸らうと思つて家を出て來たんだ。
ヘンス　僕は待つたぜ。——道德つて云ふものは、きたないなりはして居ないけど何んだか目立つた風をしてゐるもんだね。

エルンスト　道德なんか未だ僕等にや向かないね。——僕は君に逢へなかつたら、斯うやつてはゐられなかつただらう。——ヘンス、僕は誰れよりか一番君が好きさ——
ヘンス　くよ〳〵云ふなよ！　僕等が三十年もたつて思ひ出したら、きつと面白いだらうな。それでも今は何にも彼も奇麗だ。山は眞赤だ。葡萄は僕等の口に垂れてゐるし、夕風はおべつか者見たいに岩に吹き付けてゐる。

第七場

晴れた十一月の夜。灌木と樹々の枯れた葉がガサゴサと音を立ててゐる。ちぎれ雲が月の下を流れてゆく。——メルヒオールが墓地の塀を乘り越えて來る。

メルヒオール　（墓地の内側へ飛び下り）あいつ等も、此處迄は追つかけては來ないだらう。――あいつ等が娼家へでも行つて僕を探して居るうちに、こつちぢやまあ一息ついて、一體どこまでやつたんだか考へて見やう。

着物はビリ〳〵に破けちやつたし、懐にや一文もないし――どうしたつてまあ心配だ。――明日晝のうちにもつと森の奥の方へ入らなけりやあ。

何んだか僕は、一つ十字架を踏み倒したぞ。――やあ寒いんで花も凍つてる樣だ！――何處も彼處も寒いな。

死人の國の中みたいだ！――

屋根窓から這出した時だつて、此の道を歩く程骨が折れなかつたがなあ！――あの時は唯氣を落ちつけてやらうとばかりしてゐた。

だけど今となつて見ると、僕はまるで崖の上からぶら下つて居る樣に思はれる

――何も彼も無くなつちやつた――見えなく成つちやつた。――あゝ、あすこに居た方がよかつたかなあ！

何う云ふ譯であの娘が僕の勢なんだらう！――何故僕は罪がないんだらう！――どうもはつきり分らないなあ！――石割職人にでもなつて、食ふや食はずでもあの娘をなあ！――今、ちやんとするには、どうすればいゝんだい？――罪の上に又罪が重なるんだし、まるで沼へでも陷り込んだ樣なもんだ。僕にやもうこれから脱け出す力もなくなつちやつた――

僕は惡いんじやない！――僕が惡いんじやない！――僕が惡んぢやない！――だけとこんなに落膽して墓地をぶらぶらした奴はあるまいな。――まあまあ――元氣を無くさないでやらなきやあ！　だけど、どうだらう今夜にでも――僕が發狂したら何うしやう！

此の邊で最近に死んだ人を探さなきやならないぞ！　風が吹くと其の音が、墓石によつて色々に聞こえるもんだなあ！　悲痛な音だ！――萎れた花環がばらばらになつて、大理石の十字架のまわりにぶら下つてゐる――まるで案山子の森だな！――どの墓にも案山子が立つてゐる。どれもこれも氣味が惡いな。家みたいに丈の高いのもあるし、あんなのはなんざあ、惡魔だつて逃げて行つちまあ。――あゝ、金文字が冷たく光つてゐる。――枝垂れ柳がむせび泣きしながら巨人の樣な指で墓の銘を撫でてゐる。――

お祈りをしてゐる天使。――平らたい石。

雲が影を落として來た。何んて風は早いんだらう、あの音！――まるで東の方から大軍でも押し寄せて來る樣な勢ひだ。――天には星なんか一つも見えない。

花園のところの常磐木だ？　えゝと、常磐木だな？――あゝ女のだ――

此處に神の御手に眠れり

ヴエンドラ●ベルグマン

一八七八年五月五日生

一八九二年十月二十七日

萎黃病にて死去

心の清き者は幸ひなり

そして僕があの娘を殺したんだ。僕があの女を殺したんだ！――僕に殘つたものは失望のみだ。だけど此處で泣いちや居られない。向ふへ行かう――向ふへ――

モーリッツ、スティーフェル

（自分の首を脇の下に抱へて、墓石を跨ぎ越して此方へ歩いて來る。）

メルヒオール　一寸待つた！　こんないゝ機會は又とありやしない。君は時間と場所とがどんな風に關係するか知らないな――

メルヒオール　君は、何處から來たんだ？

モーリッツ　あそこから――塀の所から來たんだ。君は僕の十字架を、ひつくり覆したね。僕はあの塀の所に寢てゐるんだ。――メルヒオール、握手をしないか

メルヒオール　君はモーリッツ、スティーフェルぢやあないか！

モーリッツ　手を握らしてくれ給へ、君は僕に感謝していいんだぜ。又とこんなことはありやしない！　こいつは全く珍らしい廻り會せだ。それで僕も特別お出ましになつたんだ――

メルヒオール　君は眠らないんだな？

モーリッツ　君等の云ふ眠りと云ふものとは違ふんだ。――僕等はお寺の塔の上でも、高い屋根の甍の上でも――何處でも居たいと思ふ所に居られるんだ。――

メルヒオール　休みつこなしにか。

モーリッツ　面白半分にさ。――僕等は五月祭のの花の廻りをうろついたり、森の中の淋しい小路を歩いたりしてね。又多勢人の集まつて居る上を飛び廻つたり、不幸のあつた所の上でも、花園、お祭り、何處でもだ、人の住んでゐる家の煙突の中だつて、寢室の幕の後だつて、ちゃこまつて居られるんだ。――さあ握手をしないか。――僕等の仲間はお互ひに交際なんかしないがね、世界中の事なんか

何でも聞こえるし見えもするんだ。僕等にや人間が種々な事をやつたり、種々な物を欲しがつたりしてゐる事なんかみんな馬鹿げ切つてゐてね、僕等はそんな事を笑つてゐるんだぜ。

メルヒオール　それが何のやくにたつつて云ふんだい？

モーリッツ　何んのやくにたつんだつて？――もう僕等は善い事であれ、惡い事であれどんな事にも役にたゝない。僕等は高い所に、まあ人間なんかゐる所から、ずつと高い所に居るのさ。――それで皆んな獨りぼつちだよ。僕等はお互ひに交際なんて事はやらないんだ。だつてそんな事は煩はしい事だもの。僕等の仲間は誰だつて無くなつて了ふ樣な物は、何んにも持つてゐないよ。まあ悲しいとかうれしいとか云ふ樣な事から超越してゐるんだ。つまり自分だけで滿足してゐるんだ。まあそれでいゝんだ、僕等は生きてる人間なんか何んとも思ひやしないし、勿

論同情なんかしないよ。それでも人間なんて奴は、種々な事をして僕等を慰めて呉れるね。だつてそりや人間は生きてるんだから同情なんかしてやる樣な所はないね。僕等から見りや面白いよ。人間の悲劇なんか笑つてるんだ。――みんな自分の爲めだ。――まあ觀察してゐるんだよ。さあ手を呉れ給へ！　君が手を呉れたら、僕と握手する樣な氣になつたのが、おもしろくつて、笑ひころげるだらう。

メルヒオール　君はいやじやあないかい？

モーリッツ　そんな事は超越してゐらあ。僕等は笑ふんだよ！――僕の葬式の時に僕は會葬者の中に居たんだ。僕等はほんとに愉快だつた。メルヒオール、實際偉大なもんだよ！　僕は誰よりか大きな聲を出したんだ。笑ふて倒れちやいけないと腹を抱へるために塀の端へそつと行つたね。まあ人間の近付けない樣な僕等の

偉大な所つて云ふのは、何んだね、どんなろくでなしでも了解してやられると云ふ唯一の見地にあるんだね。――だからまあ僕がまだ向上出來なかつた以前には僕だつてやつぱり笑はれてゐたんだ！

メルヒオール　僕は嘲笑されたりするのな大嫌ひだ！

モーリッツ　生きてゐる者は、何にもそんなに、同情してやるにや及ばない！――僕も初めはそう思つてはゐなかつたんだ。ところが今となつて見りや、何うして人間なんてあんなに初心でゐられるんだか分らないからね。今なら僕は詐欺僞りなど、一點の曇りもなくはつきりと、見透せるよ。メルヒオール、どうして今になつてまで〳〵してゐるんだい！　手を貸し給へ！　一寸首を廻はせば君はずつと高い天に居られるんだ。――君の生活は怠慢の罪だ……

メルヒオール　君等には物を忘れるつで事が出來るかい？

モーリッツ　僕等は何んでも出來るんだ。さ、手を貸し給へ！　僕等は、青年の時分に、理想主義、臆病とを間違へ、年老ひてからはストア學派的な熱慮からして元氣を失つたりしてゐるのを見ると、氣の毒でたまらないんだ。カイゼルは流行唄を聞いても震へたり、賤民は若造の警官の前へ出ても身震ひしてゐる。喜劇役者の假面なんかどうでもかまはないで、假面の影の作者を見るんだ。乞食の樣な襤褸を着てゐても幸福を感じてゐる人もあれば、金が澤山あつても苦しんでゐる人もある。又戀人同志などを見れば、お互ひに欺し欺されしてゐる事が見え透いてゐるから、面と向ふと赤い顏をしている。又世の中に兩親が子供を產むのは「こんな兩親を持つてさぞお前もうれしいだらう」つて云ひたいから產んでるんだ！――そうすると子供も亦、同じ樣な事をやつてゐらあ。初戀に惱んでいる樣な罪のない娘もあると思やあ、シルレルの講義を聞いてゐる五グロッセンの淫賣婦

も居るし。――神様と悪魔はお互ひに云ひ合ひをして、どつちも酔つ拂なんだと思はせる位が落だ。――君、面白いもんさ！

君は少さい指先でもいいから一寸、僕に觸つて呉れりやそれでいゝんだ。またとこんな機會がありやしないと思つてゐるうちに、君は白髪頭に成つて了うんだぜ。

メルヒオール、モーリッツ　僕が君に手を貸しでもすれば、それこそ自分自身を輕蔑する樣なもんだ。――僕は追放された人間なんだ。僕に勇氣を貸して呉れる者は、此の墓の下に横たわつてゐる。僕は最早、高尚な感情てものを値うちのあるものだなんかとは思はれない。――見給へ。僕が墮落して行く事を、今日、防ぎ得るものは何んにもないぢやないか。――自分ながら僕は世界中で一番劣等な者だと思つてゐるんだ。

モーリッツ　何んだつて君はまご〳〵してゐるんだい……？

（假面を付けた人が出て來る）

假面の人（メルヒオールに）お前は腹が減つて震へてゐる。お前は判斷など下せる資格などは無い。（モーリッツ）にお前は行け！

メルヒオール　あなたは、どなたですか！

假面の人　わしは話すまい。（モーリッツに）消えておしまひ！――お前は此處に何んの用事があるんだ！――何んだつて又、お前は首を附けてゐないのだ！

モーリッツ　僕はピストルで自殺したんです。

假面の人　それでは、お前が居可き所に居るがよからう。お前はそれでもう濟んだ！　墓臭い匂ひをさせられては迷惑だ。おや、こりや解せないぞ！　お前の指を見るがいい！　ふフッ、もう崩れてゐる。

モーリッツ　どうか私を追ひはらはないで下さいまし……

メルヒオール　もし〳〵、あなたは、どなたで御座いますか？

モーリッツ　追ひ拂はないで下さいまし　どうぞ御願ひで御座います。もう少しの間、此處に居させて下さいまし、決して何にも御邪魔は致しません――地下はほんとうに恐ろしいのですから。

假面の人　それなら、何故偉大だなんて、べら〳〵云ふんだ？――お前だつて欺騙だつて事を知つてゐるくせに――性の惡い奴だ！　何んだつてそんな、念入りな嘘を云ふのだ、怪物奴！　お前がそんなに功德になると思ふなら、俺が許す限りは其處に居るかよからう。だが默つてひかへてゐるがいゝ、おい。――死人の手などを出すことはひかへてもらはう……

メルヒオール　一度でいゝから、あなたはどなただか云つて下さい、それともおいやなのですか。

假面の人　いやだ――俺はお前に、打ち明けて云ひたい事があるのだが、聞いては呉れまいか。俺はお前の將來の進路について、心配をしてやる積りなのだ。

メルヒオール　あなたは、――では、お父さんですか？

假面の人　聲を聞いて父親であるかないか分らぬか。

メルヒオール　分りません。

假面の人　お前の父親は、今頃はお前の母のもとに、しつかりと腕に抱かれながら慰藉を求めてゐるであらう。――俺はお前に、世の中と云ふものを見てやらう。お前の決斷の亂れてゐるのは、そのお前のみじめな境遇から生じるのだ。暖かい、晩飯でも取れば、亂れた心を笑ふ事も出來るのだ。

メルヒオール　（ひとりごとで）　きつと惡魔なんだな！（大きな聲を出して）僕が

犯した罪の後で、暖かい晩飯を食べたとて、私を平和に返へして呉れる事は出來ません！

假面の人　晩飯は何より大事なものだ！――あの娘に、子供を産ました方がよかつたのだと云ふ事を、俺はお前に云ふ事が出來る。あの娘は完全な體格であつた。けれど不幸にも、あの、母シュミットの墮胎劑であの娘は死んだのだ。――俺はお前を、一人前の人にしてやらう。俺はお前の閉ぢ込めた頭の世界を、もつと〳〵廣くする機會を與へてやらう。此の世の中で面白い事はなんでも分る樣にしてやらう。

メルヒオール　あなたはどなたですか？　どなたですか？――でなければ僕は、知らない方を信じる事は出來ません。

假面の人　お前は俺を信じなければ、俺を知る事が出來ぬ。

メルヒオール　あなたは然うお考へになりますか。

假面の人　勿論だ！――それから又、お前に選擇の自由はないのだ。

メルヒオール　僕何時でも此處に居る友達と握手することが出來ます。

假面の人　お前の友達は似面非漢じや。一ブッエニッヒでも現金を持つてゐる間は笑ふのではない。尊大ぶつた滑稽家こそみじめなものだ　世界中での憐れな奴なのだ。

メルヒオール　滑稽家は滑稽家として置いたらいゝでせう。あなたは、どなたなのか云つて下さい、でなければ僕は滑稽家と握手致します。

假面の人　さうすると？

モーリッツ　メルヒオール、あの人の云ふ通りだ。僕はずゐぶん大きな事を云つたあの人の云ふ事を聞いて、それを利用して呉れ。假面を被つて居たところで――

とにかく、何かなのだから、かまわないじゃないか！

メルヒオール　あなたは神様を信じますか？

假面の人　うむ、條件によつては。

メルヒオール　火藥を發見したのは誰れだか云つて御覽なさい？

假面の人　ベルトホルト、シュワルツ。――別名。コンスタンチン、アンクリッツェン――フライスガウのフライブルヒに於けるフランチス派の僧侶で、千三百三十年代の事だ。

モーリッツ　シュワルツがそんな事をしないで置いたら、よかつたんだかなあ！

假面の人　そうしたら、お前は首を縊つてゐるだら。

メルヒオール　あなたは道德と云ふものをどう御考へになりますか？

假面の人　何んだおい。俺はお前の生徒か？

メルヒオール　あなたが何者だか、僕が知つてゐるもんですか。

モーリッツ　喧嘩は止めて呉れ！――ねえどうか喧嘩は止めて呉れ給へ。そんな事をしたつて何んになるんだい？――生きてる人間が二人に死んだ奴が一人、眞夜中の二時に、こんな墓地に一所になつて、飲んだくれ見たいに喧嘩して見たところで仕樣がないぢやあないか！　君等の仲裁に僕をして呉れゝば、僕はうれしいがね、それでも喧嘩をしたいんなら、僕は首を抱へて行つて仕舞ふぜ！

メルヒオール　君は相不變、意氣地がないんだね。

假面の人　此の妖怪の云ふ事も、間違つてはゐない。人間は自分の品位と云ふことを忘れてはならない。――道德と云ふものは、二つの假想的實量の間の眞の產物であると、俺は思つてゐる。假想的實量とは、Sollen（せねばならぬ）とWollen（したい）である。その產物を道德と云ふのであつて、其の實在については、何等

疑ふ餘地はないのだ。

モーリッツ　その事を、最少し早く話して下されればよかつたんだが！　僕の道徳は僕を追ひ立てゝ死なしてしまつた。僕は兩親の爲めに自殺したのです。「親孝行をすれば長生きが出來る」こんな文句を聞くと、僕はおかしくつてたまりませんよ

假面の人　幻映などに溺れてはならぬよ。いゝかね。お前等の親達は、お前等が死んだ樣に、幻映などて死にはしない。正しく云へば、お前等の親達は、確かな必要にせまられなければ、恐かつたりなどすることはないのだ。

メルヒオール　其處の所迄は正しいかも知れません。――僕はあなたに、確と申し上げますが、若し僕がモーリッツと握手したならば、早晩僕の道徳だけが、非難されるんでせう。

假面の人　其處が君とモーリッツの違ふ所なのだ。

モーリッツ　だけと僕は、そんなに違つてゐるとは思はれません、少くともそんな壓制的な違ひなどは。ねえ、どなた樣とやら、僕がポケットの中にピストルを入れて、赤楊の木の並木をうろついてゐた其の時に、偶然あなたに御目にかゝれたかも知れなかつたら同じ事ですが。

假面の人　俺の事を忘れてはならぬ！　お前は今、生と死との間に立つてゐるのだ――尙、俺の考へでは、實際こんな深い爭論など續けて居る可き場所ではないのだ。

モーリッツ　たしかに諸君、寒く成つて來ましたね！　日曜服を着せられて居ますが、下着も股引もはいてゐないんです。

メルヒオール　モーリッツ君、さよなら。僕は此の人が何處へ伴れて行くか分らないけれど此の人だつて人間だもの……

モーリッツ　メルヒオール、君を殺さうとしたのは、ゆるして呉れ。それは昔しの愛着なんだ。僕はもう君を伴つて行く事が出來ないので、一生涯、僕は唯悲しみ歎げいてゐるよ。

假面の人　終ひには、誰れでも自己に歸へるものだ。——お前は心を慰められて、何物をも得なかつた。——お前は何事についても、心弱く疑ふてゐる。——ではさようならだ。

メルヒオール　モーリッツ、さよなら。よくまあ來て呉れてありがとう。十四年間も一所に、ほんとに愉快な日を過ごしたねえ！　モーリッツ、僕は君に約束するが、どんな事があつても、これから先き、どんなに變つても、成功しても失敗しても君の事は決して忘れないよ。

モーリッツ　ありがとう、ありがとう。

メルヒオール　——それから終ひに、僕が白髪頭のお爺さんに成つたら、其の時には、多分、僕の周りにゐる誰よりか君が、僕の直ぐ傍に居られるんだ。

モーリッツ　ありがとう。諸君、御機嫌よろしく。決して僕にはお構ひなく……。

假面の人　さ、おいで！

（假面の人はメルヒオールと腕を組み合はせて、二人して墓を跨いで去つて行く。）

モーリッツ　（たつた一人で）あゝ僕は自分の首を抱へて此處に座つてゐる。——月は顔を覆ふたと思ふと、又現はれて、髪の毛一本でもはつきり見える樣に光つてゐる。

——さあ、自分の場所へでも歸らう。あの亂暴な男が、氣がつきもしないで、踏み倒した僕の十字架を直さう。そして何にもかも片づいたら又仰向けに寢て、

腐れながら暖たまらう、そして笑ふんだ。

（終り）

大正十三年九月廿五日印刷
大正十三年十月　十日發行

（性の萠え出で）
定價壹圓五拾錢

版權所有
不許複製

譯者　青山茂一
發行者　東京市牛込區矢來町八番地　木下鐵馬
印刷者　東京市下谷區御徒町二ノ二四　石野觀山
印刷所　東京市下谷區御徒町二ノ二四　福壽印刷株式會社

發賣所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　大京堂書店　振替口座東京一六三九二番